

## CHAPTER 7 ハラミジョの出来事

考古学的調査をする時、直感力・洞察力そして多くの想像力を働かせずにデータを蓄積するだけでは古代文化を理解するには不十分です。私は今まで幼稚な空想だと多くの研究者に無視されてきた伝説や物語に接するたびにいつも想像力をかきたてられてきました。というのはそれらが重要な真実を基に形作られてきたと信じていたからです。ふつうの人はマノア（ハワイ）の幻の都市やインカ人が埋めたとされる金の物語を単なる伝説として無視するかもしれません。ところが、私は以前エクアドルを訪問した際、私の心にずっと深く突き刺さるような物語に出会ったのです。それはペトロニオ・ハラミジョ少佐のロスタヨス洞窟の話です。1968年夏、私はキートに戻った時、何故かピンときて、ハラミジョ少佐と会おうと決めました。私は彼に電話を入れ、私達は彼の自宅で会うことになりました。当日の夜、タクシーはエルドラドという名で知られるキートの中流階級居住地区の質素なアパートの前で私を降ろしました。ドアのベルを押すとその音がまだ鳴り止まぬうちに、ドアがパッと開き、黄色い服を来て印象的な落ち着いた様に見える女性が出てきて、「家内のセノラ・ハラミジョです」と私に告げました。彼女は長い廊下を歩いて少佐が待つ居間に私を案内しました。そこは薄暗く、タマネギの臭いが辺りを漂っていましたが、その臭いは明らかに真近の食事のものでは無く、ずっと部屋の中に籠ったままになっているような強い匂いでした。また、並べきれないほどの家具があり、いくつかのぼろぼろの穴が開いている赤いコールテンで覆われていました。私が部屋に入ると、背丈5フィート10インチは無い位の、黒いジャケットとネクタイを身に付けスウェードのズボンをはいた痩せた男が私の方にやって来て自己紹介をしました。「少佐のペトロニオ・ハラミジョ・アブラカです。どうぞよろしく」彼は私に椅子をすすめ、お互い向き合って座り、一方で彼の妻が部屋を横切り席に着きました。私は早速彼が私の友人アンドレア・サルバドールに話したロスタヨス洞窟の話題から話を始めました。「その通りです。あの洞窟は南アメリカで今まであった中で最も重要な発見の一つになるかもしれませんよ。私はヒバローのインディオ族長、**Samakache** と呼ばれる偉大な酋長と彼の息子である **Mashutaka** にそこに連れて行ってもらいました。彼らはとても有能なインディオで、アマゾンではこの信じられない洞窟の場所を知っている唯一の人です。彼らは私のガイド役で、ロスタヨス洞窟の隅から隅まで私を案内してくれたのです。Turolla さん、これは私の生涯を変えた経験だとあなたにはっきり言えますよ」と彼は答えました。ハラミジョ少佐はその話題に興味しながら、我々はかなり長く話し合いました。しかしいつも彼はその洞窟の中の様子を言及することは避けていましたし、その正確な場所を明らかにしようとはしませんでした。ところがそんな時、**Mashutaka** 族の領地の場所を明らかにしようと急にハラミジョ夫人が我々の話に加わってきたのです。その時、彼女は「ベスカド」という名前を漏らしたので、私はしっかりとその名前を記憶しました。しかし、我々の全体の会話の中では、明らかにハラミジョ少佐は洞窟の詳細な秘密を守ろうと常に心がけていました。会話が途切れると、

私は暖炉に目をやりました。マントルピースには、一方にエクアドルの国旗が、反対側には国連の旗が、その真ん中に楕円形のパネルが掲げられておりました。そのパネルの中には今夜の私のホスト役である彼の肖像画が掲げられて、その真下の方に彼の名前がかろうじて判読できましたが、それは未完成のような素朴な絵でした。ハラミジョ少佐は私がその肖像画に関心を寄せていることに気付き、「はい、お分かりのようにそれは私自身を表しています。私はエクアドルと他の国々の人々の、いわば架け橋となって全ての人々を一つにする手助けとなるような真実をもたらす事が今後の義務だと感じています。」と言いました。夜が更けてきて、私はハラミジョ少佐がロスタヨス洞窟について私に言いたい事全てを話し終わったのだと気付きました。最後に私は「洞窟の話はとても興味深く思えたのですが、もっと何か特別な情報が無くてはあなたと共同事業を引き受けることができませんね。」と彼に告げた。すると彼は「はい、それは分かっています。私は二人のインディオと洞窟を探検した時の旅行記を書こうと思っています。ではこうしましょう。次回あなたがキートに滞在する時に、私はそれをあなたに準備しておきます。」と言いました。それで私達はお休みを言って別れたのです。ホテルに戻る途中、私は今回の訪問が賢明だったかどうか疑い始めました。エクアドルの旗と国連の旗との間にあったハラミジョの自画像が私には人類の仰々しい考え、つまりもっともらしい範囲を超える考えを完全に具体化したものとして映ったからです。しかし、彼はオリエントで数年間を過ごしているし、**Samakache** と **Mashutaka** の二人のインディオに関して彼が彼の妻と話す内容は確かに真実がこもっていました。次の半年の間、私は電話でハラミジョと数回話しました。いつも話は同じでした。彼には他にすることがあったので、話に注意を向けることができなかったからです。しかし、彼はまもなくそれを公にしようとしていました。そしてついに私は彼に二人してテープレコーダーを前にして座り、彼が正に経験してきたかのようにそのまま話すことができるかどうか言い出しました。彼は快く同意し、エクアドルの航空会社であるエクアドリアナの宣伝部長が私達のセッションを記録するために録音設備と社長室を提供してくれました。私たちが社長室に入るとすぐに、ハラミジョの目は社長の椅子に目をやりました。彼は歩き回りながらその席につき、その様子はまるで玉座を得てあご先を突き出しながら部屋を見渡す王様のようで、片方の腕をまっすぐ伸ばして手を机の上に置き、もう片方の手は彼のコート、**La Napoleon** のボタンの間に押し込んでいました。私がマイクをセットしテープレコーダーのスイッチを入れる間、彼はじっと見守っていました。それから私が彼に全ての準備が整ったことを伝えると、彼はマイクを手にとって立ち上がり、マイクのコードに余裕を持たせながら机からかなり離れてゆっくり歩き、振り返りながら大きく息を吸うと、しっかりした強い声で始めました。「私は少佐のペトロニオ・ハラミジョ・アバルカです。私はエクアドル市民で、ここ数年間エクアドル陸軍将校を退役させられています。私は知的な才能には乏しい人間です。私は古代文明を研究していません。陸軍に在籍中、私は砲兵だけを研究していました。五年前に引退した際、私は大学に行き、国際関係学の学位を得ました。この学位を取得した理由は他国と外交接触したり、研究す

るための科学的援助を得たいためと、これから皆さんに話すことになる大いなる秘密を世界にもたらしたいためなのです。」この瞬間、彼は上手くいっているかどうか確かめるために不審そうに私に目をやりました。私は満足だとうなずき、続けるよう彼に身振りで合図しました。彼はまたゆっくり歩きながら続けました。「この物語の始まりは、私がやっと12歳になった1941年にさかのぼります。私はエクアドルの南のロハ州の首都ロハで、エクアドル陸軍大尉のおじと暮らしていました。或る日、私のおじは私と同じくらいのヒバローのインディオ少年を家に連れてきました。彼の父親が私のおじに教育してくれるよう頼んだのです。その小さな少年の父親は **Samakache** というヒバロー族の大勢の部族の酋長だったのです。この種族は南の **Oriente** で暮らしています、また彼らは非常に未開で野蛮なインディオです。その小さな少年の名は **Mashutaka** といいました。後になって、彼は私のおじの名前 **Gilberto** をもらって、**Gilberto Masahutaka** と呼ばれました。それは名づけ子に名親の名前を与えるというこの地域に住むインディオの習慣です。**Mashutaka** と私は子供たちには自然に起こるとても心から誠実な友情を確立しましたので、ある時彼は私に自分の領地の東のあるジャングルには大きな鳥が住む巨大な洞窟があると言いました。このようにして彼は‘タヨス’と呼ばれる大きな目をした大鳥を言葉で言い表しました。彼はその洞窟がとても深く暗い洞窟で、彼の部族の中でも最も強いリーダーの少数だけがそのありかを知っていると言いました。これが皆さんに伝えることのできる、1941年に起こった私の物語の全てです。しかし、この洞窟のことやこの描写は一生涯私の記憶に残っています。もっと後になって、1956年ですが、私は砲兵中尉としてオリエントに配置されました。その国のある場所で我々の任務は定期巡回をすることでしたが、この巡回の最中にとっても奇妙な経験～それはとても危険で非常に印象深いものでもありましたが～を一度しました。私の巡回部隊と私は東方のジャングルにある山脈の東側にいましたが、ある朝我々が起きると我々に脅威をもたらす50人のヒバロー族に取り囲まれており、彼らが兵士や私を威嚇しているのに気づいたのです。」彼の話のこの時点で、もはや陸軍少佐は部屋にいませんでした。彼の表情は幻想にふけているように見え、彼の目は部屋の壁のはるか奥を見つめていました。彼は何年も前のジャングルに逆戻りしていたのです。「・・・私はこのグループを率いている男を見ました。その顔はあまり変化が無く、時の経過だけ年をとった、私の昔の友人 **Gilberto** の顔だったのです。彼は私に気づき、そのお陰で我々のグループは殺されずにすみました。**Gilberto** は我々の命を助けるためには、我々を囚人として扱い、彼の父である **Samakache** からその許可をもらいに捕虜収容所に連れて帰らなくてはならないだろうと説明した。これは唯一酋長だけが許可できるものでした。我々が捕虜収容所に着いた時、もう一つしなければいけない事がありました。**Gilberto** は私に彼のインディオネームを繰り返し言うようにと要求しました。そうすれば父親に私が彼の幼馴染であるということを十分確信させることが出来ると言ったのです。私は確かに皆さんには他の状況下で私の記憶からそのインディオネームを引き出すことは大変難しいことだと言えます。しかし、私は彼の前に立ち彼の顔を見ると、自動的に記憶が蘇り、彼

の名前、**Marshutaka** を大声で叫ぶことができました。と同時に **Mashutaka** は私の所にやって来て私を抱きしめました、我々は和解したのです・・・。」ハラミジョは過去の記憶を再体験して熱く輝いていました。彼の顔は **Mashutaka** が彼を認識した時感じた安堵感でほてっていたし、その当時、白人達にとって恐れの対象であったこの強そうなヒバローがインディオの捕虜収容所に向かう途中で彼、つまりハラミジョを暖かく受け入れた時、満足感がどっと押し寄せたに違いありませんでした。「我々が解き放たれ、彼の捕虜収容所を去る時、**Mashutaka** はいつか私に戻ってきて欲しいと求められました。私は後でそれを実行しましたが、それからこの物語が実際に始まるのです。」

「私が駐屯地に戻った後、再び **Samakache** の捕虜収容所を訪れる許可を求めました。これは許可され、すぐ後で私は必要な準備をしました。私は **Samakache** という偉大な酋長に与える陸軍大尉のバッジを持っていました。伝統によって、我々、軍ではジャングルにおいて高い権力を持つ酋長や支配者に陸軍大尉のランクの徽章を授けます。これは **Mashutaka** を大変に喜ばせました。我々は次の数日を彼の部族の習慣、神話及び伝説について議論して過ごしました。その部族は大昔、**Auchiris** として知られる恐ろしい国の出だと **Mashutaka** は信じていました。私は彼が青年時代に私に語った大きな黒い鳥のいる巨大な洞窟の話題にゆっくりと話を持っていきました。彼の父親と多くの議論をした後で、**Mashutaka** は私をその洞窟を案内しに連れて行くつもりだと言いました。

我々、つまり **Smakache**、**Mashutaka** そして私はその洞窟とそのはるか奥に行くために二日間の徒歩旅行に出発しました。私の二人のガイド以外は誰もその洞窟の秘密を知りませんし、今日でさえ、私はその正確な場所を明らかにすることはできないのです。私は神のご加護の下で、自分の国だけでなく全ての人類の為にこの秘密を十分調査支援する組織が現れる、そんな適切な時まで明らかにほしきではないでしょう。それまで、この洞窟の場所は私の内側にある最も深遠な部分に深く保護されるに違いありません。」

この時点で、ハラミジョは話すのを止め、しばらく考えた後すぐに振り向き私に向かって「よろしいですか？」と言った。私は全く素晴らしいと言って、逆に彼が疲れているか、または座りたいかを尋ねました。「いいえ、」と彼は言った。「私は立ち上がっている時のほうが良いのです。」私は彼に向かって続けてくださいという身振りをしたので、彼は続けました。

「歩いていると、私のガイド達はこの洞窟についてもっと話してくれましたので、私の心の中では洞窟のイメージが粗野なブラックホールから巨大な地下洞窟へと変容して来ました。彼らは洞窟には多くの入り口があると言いました。それらの内いくつかは歩く日程により、2日間、3、4あるいは5日間と分かれています。それはおそらく紀元前のかかり

前に人の手によって成形された部屋を持つ巨大な洞窟でした。彼らが私に伝えたところから推定しますと、そこが面積でほぼ64平方マイルだったに違いありません。もしローマカトリック世界の会堂を100集めたとしても、皆さんは私が後になって見たものの巨大さは分からないでしょう。この洞窟はアンデス山脈がアマゾン盆地の低地に交わるエクアドルの東部山脈を蜂の巣状にする数百のうちの一つでした。それらはとてつもなく巨大で、非常に深く、非常に長い洞窟で、その内側にはたくさんの小丘や山頂、多くの平原そして数多くの神秘があります。私が二日後に目的地に着き、**Samakache** と **Mashutaka** がこれら洞窟の一つへ導いてくれた時の私がそうであった以上に、何も知らない人が急に入れば、この中の全てのものに畏敬の念を抱きます。二日間我々はその内部へと何十キロも歩き登りました。我々が深い峡谷や山峡を横切るとそこには‘**penas blancas**〜白い山頂’と呼ばれる高い山々に囲まれた台地がありました。やっともう一つの小さな台地を乗り越えて下を見下ろすと足元には程よい大きさの川が見えました。我々は私が今まで経験したことが無いようなかなりの高さからそこを飛び越え、渡りました。すると小さな洞窟の入り口ようなところに到着したのです。川水を背にしてその中に入っていくと、足跡が完全なシンメトリーを作りながら踏んでいることに気付きました。今我々は建築的な線で切り開かれた大きな洞穴、会堂の中にいたのです。入り口の右側には以前ここにやって来たインディオ達が残しておいたいくつかの松明が壁に寄りそうように置いてあった。我々各々一つずつ松明を灯しながら、次に広い平原に通じている大きな丸い歩廊へと歩いていきました。前方へ歩いていると、水が3〜4フィートの深さで溢れ出ている運河にやってきました。我々は水に浸かりながら、この運河を渡りきるとやっとな洞窟の反対側に上がりました。どうやらアンデス山脈の一つに通じている一連の洞窟をどんどん登って来たようです。我々はまるで太陽がたくさんの水晶で輝いているようなかなり明るい大きな丸天井を持った部屋に出ました。この部屋を形成しているのは自然の石ではありませんでした。それらは光沢のある石、白い石、緑がかった石、そのいくつかは黒いものもありましたが、手作業で形成されており、まるで完璧に建築設計されたように配列されていたのです。この洞穴は我々が今まで見たもののどれよりも広く、キートの町の中で最も大きな大聖堂の広さを持っていました。洞穴の中心部分の右側には痩せている人で12人、恰幅の良い人で7人が十分おさまる広い曲がったシートがありました。我々はこの洞穴の左側に沿ってずっと歩いていき、ちょっと階段を上がると、そこは我々が最後に到達することになる台地に行くまででは一番高い平原に達したのです。そこからは他の部屋に通じている異なった方向に伸びるいくつかの違った並びの階段が広がっていました。我々はそのうちの一つに入り、大きなドアの前にやってきました。**Samakache** と **Mashutaka** は私に入るのではなく内側をみるように命じました。その部屋は岩が黄、真っ白、青白いピンク、空色、赤そして紫の色を放ち、まるで虹色全色に輝いていました。床の上にはこの国では‘**jorutos**’ ‘**pildas**’ として知られているたくさんの **bolitas** や玉石があり **Auchiris** によれば彼らの先祖の伝統的な玩具だったのです。それらは床にばら撒かれ、その中の金色と黄緑色のもののいくつ

かは部屋のわきの方に集まっていました。私は近くによってみると、全てに現代風の速記のような、奇妙な書体の銘が入っているのが分かりました。その時に **Samakache** は私に安全な場所に下がっているように命じ、彼はこの部屋の入り口で岩を投げつけました。岩は当たって、大きな石板が転がり落ち、**Samakache** の投げた石は裂けて、その石版は黒いこなごなの石になってしまいました。**Samakache** は私にこの石のドアは一晩たてばさっき立っていた場所に元通りなるはずだと言いました。彼らはそのように説明しながら、閉めてすぐに開けることによって光と暗闇を使い説明を補足しました。私にはその奇跡を弁明する方法はありません。」

ハラミジョはしばらく休止し、次に時計をちらりと見ました。正午でしたが、彼は長い間話し続けていたのです。私は彼に空腹なら昼食を取ろうか尋ねました。「そうですね、今それを考えていました。」と彼は言いました。これまでのところ、ハラミジョの説明はとても目の当たりに見るようなものだったので、私は松明によって照らし出された色彩豊かな洞穴や崩れ落ちたと思ったら不思議なことにすぐに元に戻ってしまった大きな石のドアの様子がほとんど分かりました。しかし、私はインディオたちによって語られる先祖の言い伝えを聞いている時、美しい神話を聞いているのと同じ感覚になっていることに気付くようになりました。昼食の最中ハラミジョは、洞窟はとても重要な意味を持ち、その秘密が明かされれば全ての人類が利益を享受できるし、そして私が今まで聞いたことが無いような最も深遠な部分はまだあるのだとさらに忠告しました。栄養のある食事の後、我々は部屋に戻り、彼はマイクを拾い上げて先ほど中止したところから再開しました。「我々は階段のあるところまで戻り、二番目の部屋に上がって行きました。中へ歩いていくとそこには我々の前に立ちはだかるような石のドアは無く、気付くとたくさんの彫刻された動物の石像に取り囲まれていたのです。私は手でそれらに触れました。象、マストドン、爬虫類、蛇、コヨーテ、ジャガー、馬そして鳥の彫像がありました。これらの彫像のいくつかは小さな台の上に立っていて、他のものは床に置かれていました。ほぼ全て高さが役30センチほどでした。しかし、その中に姿が清廉なため、私が例外的に好印象を持った一種類の動物がいました。それは三脚台座に立っている褐色の猫で、光り輝く赤い目を持っていたのです。全ての中で最も奇妙なものはこの部屋の中心に横たわっている大きな水晶の棺で、その厚さ約2.5センチの薄いものでした。内部には金で成形された人間の骨格がありました。それはなんと2.8メートルの長さでした。私は手を広げてそれを測ったのです。それは人間の骨格の全ての部分の骨で完成されていて、あたかも別の時代に住んでいた人類の形態を保存するかのよう金で作られていました。おそらく、これら大男は今日でいうアマゾンの奥地に住む **Achuyanos** という部族で、かつて **Auchiris** の奴隷であったのでしょう。**Achuyanos** 族は白い肌、黄色い髪、青い目を持つ背の高さが皆2.5メートル以上はあり、とても強く高い精神性を持っているのです。従って、私は **Achuyanos** 族が水晶の棺にあるこの骸骨を作った人々の子孫だと思っています。」ハラミジョはほんのしばらく休止して、

物思いにふけりました。その後で彼は私を見てこう尋ねました。「私が言っていたことを聴くことは可能ですか?」「もちろん。」と私は言って、昼食以後始まった部分にテープを巻き戻しました。ハラミジヨは席に座り、我々は動物の石像、水晶の棺そして金の骸骨のある部屋の部分のテープを聞きなおしました。ハラミジヨが自分の録音された声を聴くのは初めてのことでした。そして彼は部屋中自分の声が一杯になっている間、うっとりしながら微笑を浮かべて座っていました。録音した部分が終わった時、彼は「うん、とてもいい、非常に良い出来だ。」と言いました。その後、彼は立ち上がり、マイクを拾い上げて心機一転再開しました。

「我々は中央の部屋に戻るとすぐ3番目の部屋に通じる別の階段の上に立ったのです、それはかなりありましたがね。この部屋は何か精神が威嚇されるようなところでした。そこには半獣半人のおそらく80体の像がありました。いくつかは鷹の上の部分と馬のより下の部分を持っていました。また、手の代わりに羽を持った人の像には象の足、豚の飛節あるいは大きな家禽の足を持ったものがありました。この部屋の隅には金に間違いのないか、あるいは金に非常によく似たかどちらともいえる黄色の金属で作られた大釜が台の上にあります。その背後には怪物のような頭と金色の歯を持つ人の像がありました。彼の口は開いており、髪の毛は垂れ下がり、耳と足はとても大きかったです。彼は大釜を睨み付けながら、その後ろに立っていました。私は中を覗きこむとそこに10人か12人位の子供の像を見つけました。私は深い衝撃を受けて、子供たちが料理され食べられてしまったかもしれないこれら奇妙な時代へと心が疾走していました。我々はこの恐ろしい部屋を後にして中央の部屋に戻りました。あたりは暗くなっていました。夜の帳が落ちようとしていて、常態では岩のひび割れや穴から入ってきて、ある水晶の岩から別のものへ広がるように屈折したり増殖したりする日の光は消えていました。ここで我々は夜を過ごし寝たのです。」私にはハラミジヨの話術が何だか今になってとても滑らかに下稽古したような感じに見え始めたのです。それはあたかも彼が既に以前多くの経験してきたことを暗唱していて、それを前もって注意深くやり遂げていたかのようでした。「翌日我々はとても早く起きて、午前中と午後の始まりにかけて別の洞窟の調査に費やしました。この洞穴は他のもののようなピンク、黄色、青色そして赤い色の岩では作られていませんでした。新しい部屋は非常に特別な色の水晶を使って完璧に作られたアーチを持っていました。そのアーチは20～25メートルの高さがある約15本の円筒状の柱に支えられていて、そのいくつかは赤みがかった水晶、黄色の水晶、青い水晶で出来ていたが、それらすべてに共通するのは、鉄筋コンクリート建造物の中にある鋼鉄のフレームのように中央に核となる完全に真っ白な水晶があることです。我々はこの丸天井のある部屋を歩いていると、私のガイドが約20×20メートルの正方形の広い部屋に案内してくれました。私は周りを見回し、本当に幸せを感じました。

まるで図書室の中のようにいるみたいで、その部屋は棚で一杯でした。壁の全てに棚があり、真ん中にも立っていました。また、その棚は全て金で作られていました。これらの棚の上には深い赤色の背表紙を持つ黄色の金属で出来た本がありました。それらの本は約2フィート平方の大きさと約6インチの厚さでした。本のページはとても、とても薄い緑がかかった黄色の金属シートで、その金属に銘が刻印されているか、あるいは彫られていました。これらのシートのいくつかには我々が最初の部屋で見た玉石と同じような速記に似ている奇妙な字体で書かれていました。他のシートには曲線と直線、破線、幾何学模様、三角形、台形、円と半円および接線のようなシンボルがありました。言い換えれば、それらは幾何学の本に似ていました。全部でこれらの本が約200冊ありました。私は最も高い棚から本を取り出しましたが、再び戻すことはできませんでした。というのはそれらが非常に重かったからです。おそらく重さが50キロ程あるようなので、持ち上げて戻すことが全く不可能でした。Samakacheは床の上に置いたままで全く構わないと言いました。私はシートの一つを切り離したかったのですが、ガイドは私にどうあっても持っていくことは出来ないと言いました。全ては神聖なものだったからです・・・。」今までのハラミジョの物語にとっても近い間柄のものがありました。その時、それが私に打撃を与えました。彼は神話的な古代文明、秘密が再び暴かれる時人類に授けられる大いなる利益、強く知的な背の高い金髪で碧眼の人々、そして秘密の書き込みがあるたくさんの金色の本といった、アトランティス伝説の本質的な要素をどれも勉強していました。アトランティスの「記録室」の伝説のどの重要な特徴もここにあったのです。彼らは私に他にもこんな図書室があるかかたにあるが、そこまでは長く歩くことになるだろうと言いました。これは不可能でした。というのは私の休暇が終わりに近づき、駐屯地に戻らなければいけなかったからです。我々の洞穴からの出発は到着した時と同じくらい異常で、恐ろしく危険でした。我々はあの全ての奇妙な部屋を通して引き返し、再び外に出る為運河を歩いて渡らねばなりません。私は村に、そして駐屯地に戻り、こうしてロスタヨス洞窟の経験を終えたのです。しかし、タヨスの地域に存在する何百という洞穴の中でこの洞穴は非常に特別なひとつです。私が信じるこの洞穴はエルドラドです。フランシスコ・デ・オレリャーノというスペインの偉大なアマゾン発見者はこの伝説を聞き、1542年、それを見つけるため400人のインディアンを連れキートを出発し東へと旅立ちました。彼は成功しませんでした。アマゾン川を発見し、この情報をスペインにもたらしめました。その後、彼は再びエルドラドと探しに新しい世界へ戻ってきました。この最後の遠征で彼はアマゾンのジャングルの中に消えてしまいました。「我々は皆エルドラドについて読むと、それが都市であると信じます。今私は言うことができます。その通り、エルドラドは都市です、しかし深く埋められているのです・・・。」ハラミジョは休んだので、この機会に私はエルドラドがスペイン人にとって黄金都市だと最初は考えられてきたが、実際はコロンビアのグアタビア湖の地域にいるチブチャ族のいるインディオの国から生まれた伝説であると彼に言ったのです。そこでは古代において最も重要な儀式の日に、彼らの偉大な統治者が自分自身の体



に最初油を塗り、次に金粉で覆ったのです。そして一度金色に塗られると彼はエルドラドつまり「金色のもの」になりました。後になって、エルドラドの名前はそれら儀式が行われる宗教中心施設に適用されて、ついに偉大な神聖な都市を意味するようになったのです。ハラミジョは「それはとても面白いです。」と言いました。すると彼は向きを変え、しばらく思いふけたまま床を見つめていると、全く私が言ったことを無視したまま話を再開しました。「さあ今、私は祖国の利益を損なうことなく、とりわけ私が愛し尊敬している彼らヒバロー族、特にいつか一族の酋長になるであろう私の幼友達 **Mashutaka** の感情を損なうことなく科学的な方法でこの洞窟に存在する偉大な古代文化を研究したいのです。**Mashutaka** の最初の息子は夜空が赤い閃光で染まった時に生まれました。部族の伝説ではこれはその子が‘**Yucalchiri**～**Yu** は神を、**chiri** は息子を意味する～’と名づけられた‘カラ神の息子・ユーカラの伝承者’として生まれてきた兆候であると言われていました。彼は神の息子です。**Yucalchiri** は成長していけば、部族の酋長になるだけでなく、私がロスタヨス洞窟で見たあのヒエログラフや奇妙な字体で書かれた銘全てを判読する知識もまた獲得するようになるのです。**Mashutaka** は自分の父親の伝統を継いで、以前何年も私のおじが彼に施したように、私に自分の息子 **Yucalchiri** を教育してくれるよう連れて来ました。**Mashutaka** は自分の息子の教育費を支払うため、私に洋ナシのように大きな金色の一片と何年かにわたって他に金貨を与えました。私はそれらを売り、そのお金で **Yucaichiri** を教育するだけでなく、南米の多くの国々を旅行して知識を増やすことができました。だから私はペルー、チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジルおよびコロンビアを知っています・・・。」ハラミジョが話した果物のような金貨の陳述は、1527年にピサロの乗る船が今日ペルーとエクアドルの国境線を付けている **Rio Tumbez** の河口に到着し歴史的第一歩を踏み出した記述を思い出しました。ペドロ・デ・カンディアはインカの町と **Tumbez** の要塞にあるとされる信じられないほどの富をより早く確かめるために使者として岸に送られました。カンディアはペドロのところに戻り、**Tumbez** は本当に壮大な場所であると報告しました。その華麗なものの中で彼が記述しているのが、金と銀の装飾物で飾られている寺院を含む壁によって囲まれた複雑な建物、ペルー人の高貴な処女の花嫁のための住居、そして全て純粋な金と銀で作られた野菜・花・動物・果物をそのまま全て金と銀で原物どおりに作った素晴らしい庭園でした。ハラミジョの声の音色は変わり、私の注意は彼の話に再び引き戻されました。「彼が自分の息子を私に預けてから10年後の1966年のことです。**Mashutaka** は **Oriente** から出て私の町にやって来たのですが、私から **Yucalchiri** をひたたくるようにして何の説明もしないで彼を連れて行ってしまったのです。」ハラミジョは話すのを止めました。私は話が終わったのかと思いましたが、彼は私が何か言おうとする前に振り向き私を直視したと思ったら、非常に感情をこめてまた続けました。「私は **Mashutaka** との少年時代の友情のために何十年もの長い間ロスタヨス洞窟の秘密を守ってきました。それなのに今、彼は説明も無く私から彼の息子を奪っていきまし、私を殺そうとしているのです。しかし私はヒバロー族があの大偉大な考古学博物館の唯一の所有者

であるとは思いません。彼らはその真の意味を知らないのです、ただ守護者であるだけです。私は **Mashutaka** が彼の息子を取り上げたことを非常に憤慨しています。私はその少年を同義的に知的に保護しましたし、**Mashutaka** から我々二人のための経済的援助を受けていました。私が多くの国々に旅行することができたのはこの援助があったからです。そして今、私は旅行することが出来ませんし、エクアドルだけでなく世界のものであるこの秘密は未知のままなのです。私はこのことについて長く深く考えましたが、この発見を達成するには科学的な援助を供給できる国際的な範囲を持つ組織が必要なはずだと思います。秘密は申し上げるつもりです。あなたは私が信用するに足る人だと感じるからです。そうです、私は大きな切迫した危険が含まれているとは理解していますが、あなたを洞窟に連れて行こうと決心しています。私は怖くはありませんよ、これは全く事実です。しかし、我々は前進し、これらの障害を克服しなければなりません。」彼の最後の言葉の残響音が消えていくにつれ、私に漠然とした不安が忍び寄りました。部屋はテープレコーダーのハム音を除けば静かでした。私は机に移動し、そのスイッチを切りましたが、しばらく今後の進行の行方を熟考するのに頭が一杯になりました。全ての考えや決心を脇へやって、この物語は本当に並外れたものであり、私がそれについて注意深く考える時間を持ってから、もう一度接触するつもりだとハラミジョに告げました。私はその午後彼を残したまま去りましたが、気分は人生全体が急に非現実なものになったみたいでした。ホテルの部屋に戻るとそこで、私は座り、タバコに火をつけ、ハラミジョの話の中で合理的な部分と不合理な部分を分けようと落ち着きました。彼の **Oriente** における兵役時代は真実であると私は知っていました。**Oriente** 1 また彼とインディアの **Mashutaka** との交際の詳細は起こりえませんでした。アンドレア・サルバドールとその他大勢は私に **Oriente** やアンデス山脈の至る所におびただしい洞窟が存在することを告げました。しかし、ハラミジョがロスタヨス洞窟の内側で見たと言った人工物の描写は私にとって全体的に信じられるようなものには思えなかった。他方で、そのような洞窟は実際に滅びた文明の考古学的遺跡を包含していたかもしれませんし、ハラミジョの想像力がそれらを水晶の棺、金の本で満たされた図書室、奇妙に見える動物の像で一杯に満たされた部屋、光と闇の力が作用する石板に変化させてしまっただけかもしれません。ハラミジョはアラビアンナイトの物語やアトランティス伝説の多くの翻訳を読んだために十分に教育されていました。彼は確かにこれを全て伝説のごった煮に置き換えるのに十分な想像力は所有していました。しかし、彼の動機は何でしたか？評判、お金？彼はインディアから経済的援助を失ったと言っていました。それは彼の話と何か関係がありましたか？おそらく彼は正気ではなかったのではありませんか？私はたとえロスタヨス洞窟が存在してハラミジョがそれを発見できたと仮定しても、**Oriente** にそれを調査しに行く探検にのるような位置にはいませんでした。私の考古学的概念の証拠は寓話では無く事実に基づかなければならないからです。まだ、私はハラミジョの物語が少なくとも一部分でも真実があるのか、または彼が単なる素晴らしい山芋を紡ぐ紡績工かどうか思わずにはいられなかったのです。

## CHAPTER 8 良い神父

私がクレスピ神父の名前を言及したフリオ・エレラ神父とキート近くの **Guapulo** という小さな村で昼食を取ってから2年が経っていました。彼は南エクアドルの最も古い町の一つ、**Azuay** 州の首都クエンカにおいて、若い頃 **La Mision de Maria Auxiliadora** を見つけた年老いた聖職者でした。エレラ神父が言うにはクレスピ神父は宣教師の仕事をして来た40年以上もの間、エクアドルで知られているのとは違う法外な多くの「古いもの」を溜め込んでいる根っからのコレクターだったそうです。エレラ神父は右手に持っている白ワイン入りのグラスがキラキラ輝いているのを一心に見ながら、そのコレクションについて詳細を語ることに立ち入りたく無いと言いました。私はクエンカに行き自らそれを見るべきであり、そうすれば次回我々が会った時、それについてどう思ったかを彼に言うことができるのです。私は彼の提案に従うことを決心しました。数日後、私は冷たい風が吹き寄せ、雨が激しく **Maria Auxiliadora Mission** のステンドグラスを叩いているクエンカに着きました。私は修道院長、ペドロ神父を見つけて自己紹介したところ「クレスピ神父はあまりにも病気が重いので誰にも会うことができないが、喜んで私とそのコレクションの保管されている納屋に連れて行ってあげましょう。」と私に言いました。我々が、一つの壁にしか窓が無く、すずのメッキが施された屋根を持つ建築物の方へと一緒に歩いていきますと、ハンマーを使って二度打てば耐えられない位錆びた古い南京錠を **Lova** 神父が開けました。彼はスイッチを入れましたが、明かりは点きませんでした。「おそらく嵐のせいです。」と彼が言いました。「しかし、何か物を見るには十分に明るいと思うのですが。ただ不幸にも私はそのコレクションについて何も言えません。」我々は中に足を踏み入れ、周りを見渡すと、圧倒されました。納屋の長い方の壁の両側にそって作られているベンチが完全に工芸品の山の下に埋もれていました。私はベンチと天井の間に作られた棚もまた工芸品が載せられているのを、暗闇の中で識別することができました。平板と板金が列をなして直接天井に掛けられ、斜めになっているのがほの暗い光の下で見ることができました。一見したところ、私はそれらが信じられないような宝物のような印象を持ちました。しかし、その物の大部分はとても風変わりで、全体的に以前私が見たことのあるものとは似ていないように見えました。粘土、石そして金属が融合された工芸品は全て奇妙で漠然とした形に見えました。もしもそれらが本物であったなら、何故どこか他の場所でもこれと同じ形をもつものが無いのか不思議に思いました。本能的に私は何か狂っているのではと感じましたが、それを的確に指摘することはできませんでした。「これらの工芸品はどこから来たのですか？」私は当惑している **Lova** 神父に尋ねました。彼はちょっと肩をすくめて「あなたはそれについてクレスピ神父に話をしなければならいでしょう。」と言いました。我々は納屋から出て歩き、**Lova** 神父は戸を閉めて鍵をかけました。そして私とその **Mission** を去る前に彼は言ったのです。「クレスピ神父が良くなったら戻って来ると良いと思います、

というのは別にもっとたくさんのもを納めた部屋があるからなのですが、その鍵を持っているのは彼だけなのです。」私は彼の労に感謝しながら、何がその他の部屋に含まれているのか疑問に思ったので、クエンカに戻ることができたらクレスピ神父に対しコレクションについての質問ができるように思ったことを書き留めておきました。二年経った今、私はクレスピ神父のことをほとんど忘れていましたが、ハラミジョ少佐との会合の後すぐ、また彼の事を考えました。もしハラミジョの話にいくらかの真実があったなら、つまり彼が述べたようなそんなものを作った文化が南 **Oriente** にあったなら、クレスピ神父のコレクションの中に少なくともいくつかがこの文化に影響されたものだという可能性があるに違いなかったのです。これはそのコレクションが奇妙でユニークな形であったことが説明してくれるかもしれません。私はもう一度クレスピ神父に会うことに決めました。私はクエンカに戻りましたが、**Le Mision de Auxiliadora** にある教会が一年前火災によって殆ど完全に消失してしまったことが分かりましたが、クエンカの高潔な心ある市民がそれを再建する方法に応じていました。幸運にもクレスピ神父のコレクションを入れてあった建物は無事で、クレスピ神父自身も元気で私に会うことができました。私は、インディオに対して良い影響を与えたと知られている学校や12人か14人の聖職者の一団を含め布教団体を設立したというような今までのクレスピ神父の並外れた仕事振り全てのことから、彼がインディオの原住民に影響を与えたような敬虔で生まれつき申し分の無い規則正しい人であると思っていました。やっと彼が私の前に立った時、全く違う感じで現れました。彼の修道衣はとても古めかしかったので黒から灰色がかった緑に退色していて、まるで何ヶ月も洗っていないように見えましたし、油や食べ物のおしみが、部分的ではありますが、彼の長いもじゃもじゃの顎鬚によって覆っている正面部を流れ落ちていました。私はちょっとの間彼と話した後、彼が唾を吐くだけでなく、口から口髭の毛を吐き出すように、繰り返し唾を吐き続けているのに気付きました。彼がちょっと言葉を吐くと、彼の口髭の毛はしばらく空気中にはためき、話し続けている時は口もとに落ち着いていました。彼の年齢は漠然としていて、少なくとも70歳だったに違いありません。また彼がエクアドルで年月を過ごしている割には彼の話すスペイン語はいまだ貧弱だったことに私は驚きました。私が彼の母国語であるイタリア語で話そうと提案したら、彼は「おお、もちろんいいですよ。それは物事を進めていく最良の方法です。」と言いました。私はインディオの母国語は言うまでも無くスペイン語が達者でなくて、彼らとちゃんと付き合うことができるのだろうかと思いましたが、しかしその後ちょっとして明らかになりましたが、彼は彼らと全く緊密に付き合う必要が無かったのです。我々は教会の前の中庭に立っていると、インディオの流れが絶えず我々の前を通り過ぎ、彼らが教会に入る時彼の祝福を求めています。彼は彼ら全てに一連の考えを切れ目無く話したのです。「おお、そうです、**Turolla - Benedice domini** - 私は嬉しいです。まず何よりも我々の **benedice domini** をあなたに示します。」明らかにいくつかのラテン語が自動的に話されて、彼とインディオとの関係を維持していました。クレスピ神父は私を前に **Lova** 神父と訪れたと同じ長い納屋に連れて行き、

同じ錆びた鍵を取り出してそれを開けました。我々の中に入り、彼が自分のコレクションを見せ始めました。彼は最初に特殊な幾何学的デザインを持ったいくつかの大きな壺がある棚を指差しました。「あれらはインカ人がやってくる前に存在した文化があった **Ingapirca** という場所のものです。」と彼は言いました。私は壺を調べて、それらが本物のコロンブス以前の時代の物のように見えたが、同時に彼の何百というコレクションの方に身を翻して、彼がどのようにしてこんな莫大な量のを集めたのか尋ねました。「私の父がイタリアで亡くなった時、彼は私に遺産を遺しました。それで欲深い貿易業者や闇商人からこれら古代の宝を救い出すことより他に良い考えが思い浮かばなかったのです。」と彼は答えました。その後、彼はメソポタミア・エジプトの文化やフェニキア人の海洋における展開、そして新世界のメソアメリカ人やインカ人の文化の歴史について、生かじりである今日の歴史までにも及ぶ痛烈な批評を長々と始めました。話しながら我々が大きな納屋の長さだけの距離を歩いた時、彼は自分が言ったことの重要性を例証し強調している多くのものを指差しました。永遠の神の肖像を頂につけているフェニキア人の王の火葬場を描写し形を整えられた小さな陶磁器のピラミッド。太陽、ピラミッド、蛇そして人間のイメージを備えながら粗雑に切り分けられた石の平板。真に迫った陶磁器の外見を保持しているサクス、フルートそしてクラリネットといった陶器の楽器の完全なコレクション。手を合わせひざまずいてお祈りをしている粘土の女性小像が隣にある金属製の翼を持つケンタウルス。ギリシア人と一緒にいる翼のあるライオンのようなシュメール人のおそらく陶器。識別できる形や時代が無い切り分けられたもので、ハンマーで鍛造された銅製の像と奇怪な石。十字架やキリスト教のシンボル、宝冠そして王冠を備えた完璧な司教冠。バイキングの戦士の被り物を思わせる広がった角を持つヘルメット。既知のエクアドル文化の工芸品の間に、あちらこちら無造作に置かれて私の目の前に広がっているこれら何千以上もある不思議なもの。私はこの全てを見た時、少し不安な感じがし始めました。その時クレスピ神父は私のほうに振り向いて「宝物部屋を案内しましょう。」と言いました。明らかにその部屋は以前訪問した時 **Lova** 神父がクレスピ神父だけが鍵を持っていると言っていた部屋でした。彼がドアを開け電灯をパチッと点けると、私はよるめくほどの衝撃が走るものを見ました。部屋全体に金属の物体が何千と吊り下げられている合板の板がはめ込まれていました。粗野な飾りダンスが壁に沿って作られていて、あらゆる種類のもの中に入れておきました。何十もの箱の中には各々4から6個の金色の金属板が入っており、それには龍、ラクダ、象、椰子の木、ピラミッド、半月、星、太陽の象徴、神や神性、戦士そして一定の様式を持った船をハンマーで浮き彫りにしてありました。「これらは私の金と銀の財宝です。」と彼は両手をこすり合わせて、得意そうに大声で言いました。私は各々およそ高さが51センチ、幅が13センチの正方形で、中が56の四角に分割されている重い黄色の金属板に注意が惹かれました。というのはそれらが他のものとは異なった浮き彫りを持つシンボルだったからです。クレスピ神父はこの平板がエジプトのファラオ戒律を含んでいるものだと厳粛に断言しました。すると箱の一つから彼は緑がかった金属のものを

探し出しました。それには鳥が蛇とバランスよくかたどられたエジプトの円盤状のものが描かれていました。「非常に古い暦です。」と彼は言いました。部屋の中央の床には金の彫刻で精巧に作られたようなある種のボートかカヌーが横たわっていました。それを指差しながらクレスピ神父は言いました。「これは古代の太陽神が運河を旅した時に使った‘帆船’です。」同時に彼はエクアドルの古代種族が偉大なとても古い文明の子孫であると確信していると説明しました。彼のコレクションは保管する為、ここエクアドルに持ってこられたこの文明の宝物、世襲財産でした。Pino Turolla とクレスピ神父は金色の工芸品を手に持ち（そのまま）、この奇妙なコレクションを調べながら、あちこち私が納屋の中を歩いている間、クレスピ神父はぶらぶら歩いていました。少数の陶磁器は別として、全てのものは出所が疑わしいものでした。では何故それらのいくつかが私にとってよく知られているように見えたのでしょうか？急に私はその理由が分かりました。ハラミジョ少佐がああロスタヨス洞窟における風変わりな物語で言っていた多くのものが私の目の前にあるクレスピ神父の棚の上に置かれていたからです。勿論、ハラミジョはここでこのコレクションを見ていました。彼はこの場所で多くの年月を過ごし、古代のものと言われている全てのものに魅せられて、クレスピ神父コレクションの噂は彼の注意を引いたことは確実でした。そして私はクレスピ神父のコレクションの中にハラミジョの話の確証を見つけないが為にクエンカに来たのです。代わりに私は正にその反証を見つけました。つまり、そのコレクションの起源は疑わしいのではないかという証拠になったのは、少し静かな崇拜の念でクレスピ神父が窪んだ板から黄色がかった金属宝珠を取り除き、それを私の方に広げて見せ「とても古い、君、glyphics を伴ったとても古いものだ。」と言った時でした。私がこの不可思議な宝珠に近づいて見ると、それが‘RF(Republique francaise)’という銘を持つ水洗トイレの浮きであることがわかったのです。私は彼がからかっているのだと思って、くすくすと笑いながら彼を見ました。しかし、彼は「とても古い、君、たぶん神の生まれる三千年も前のものだ。」と言いながら、その顔はとても真面目でした。クレスピ神父は他のものを指差しながら続けましたが、彼が収集したものに関して歴史的事実と彼の異様な説明との間の矛盾が正常な心をかき乱すレベルにまで達し始めました。私はコレクションを十分見ましたが、クレスピ神父はまだ終えていませんでした。「来て下さい。」と彼は言いました。

「私はあなたにこれから見せたいものがあります。」彼は私を納屋から連れ出すと、鍵をかけ、聖職者の寄宿舎にある彼の簡素な家具付の部屋に連れて行きました。そこで彼は一つの箱を開けて、大きな一枚の羊皮紙を引っ張り出し、私に手渡しました。彼は「これはレオナルド・ダ・ヴィンチの図面です。」と言いました。私は今まで非常に軽々しく信じて来ましたが、それを見ると、ダ・ヴィンチのものにとってもよく似ている人間の手の解剖図が目に入って来たのです。おそらくそれは本物でした。しかし同時にクレスピ神父は絵が描かれたキャンバスを引っ張り出し「これはラファエルのものです。」と言いました。そしてもう一つ、またもう一つ。「これはチアブーエのもの、これはボッティチェルリ・マドンナのもの、またこれはティントレットのものです。」聖職者の部屋の一方の隅にある壊れやすい

箱の中に無防備に横たわっている40か50のルネッサンスの大家の作品は信じがたいほどでした。まだ私は自分の疑問を隠そうとして、どのようにしてこんな素晴らしい絵画が全て所有できたのか彼に内々尋ねてみました。彼は言いました。「私の修道会、つまりサレジオ修道会はイタリアにおいて最も古いものの一つです。その創立者の多くはルネッサンスやそれ以前に遡る偉大なイタリアの名門の子孫なのです。その一族はこれらの絵画を持っていました。しかし当時イタリアでは紛争の時だったので、修道会によって一緒に集められ、保管するためここに持ってこられたのです。」私はクレスピ神父のコレクションについて尋ねたかったのですが、ひとつの質問はとても静かに、そしてとても如才なく始めなければいけないので次のように私は言ったのです。「Lova 神父、もしクレスピ神父が言っていること全てが真実なら、どうしてこんな極めて貴重な工芸品が古い納屋の中、保護無しの薄い窓ガラスの後ろに置いてあるのですか？」Pino はクレスピ神父のコレクションが納められている石の部屋にいます。Lova 神父は知っているような微笑を浮かべて言いました。「そうですね、実際我々はクレスピ神父がそれらのために必要な建物を建てるほどお金は持っていません。」何ヶ月か後 Lova 神父と私がもっと親しくなると初めて、彼はクレスピ神父のおびただしく増え続けているコレクションと彼の奇妙な考えが彼や修道会両方にとって困惑の種になっていると告白しました。「それらがどこから来たか知っていますか？」私はその時彼に尋ねました。彼は私を見て言いました。「我々は知りません。クレスピ神父はとても秘密主義なのです。たぶんあなたなら時間があれば分かるかもしれません。どうかやっていただけませんか？」初め、私はクレスピ神父についてその古参者に話しかけてながら、回りをチェックすると静寂の壁に直面しているのに気付きました。彼らの方では明確な遠慮がありましたが、徐々に話が明らかになりました。数十年前、クレスピ神父の心は変わり始め、古代エクアドルの文化はエジプトから生じたという考えに見せられるようになりました。彼はファラオの一人がエジプトを去り、大西洋を横切ってアマゾンの河口に航海したと信じました。その時彼は東アンデス山脈を越えているこの偉大な川を航海し、今日エクアドルとして知られている南の部分に自分の宮廷を確立しました。クレスピ神父はエジプト、フェニキアおよび他の古い世界の文化の本や写真を一緒に集めては現地人に与えてこう言いました。「もしもこのようなものを見つけたなら私のところに持ってきてください。そうすれば報酬をあなたに差し上げます。」インディオやメスティーソは大喜びであったができなかったので、それらの写真を撮りそのデザインのままの工芸品を作ったのです。その後で彼らはクレスピ神父のところにそれらを持ってきてはトラ、墓、地すべり、あるいはどんなどころでも見付かったと言いました。この交換は何十年間にも及びました。クレスピ神父のコレクションは増え続け、地元の職人の何人かはとても現代的な青銅、黄銅、銅および錫から作られた‘古代の’もののすっかり偽造と装飾の専門家になってしまいました。クレスピ神父は自分で作った夢の世界に暮らしているということを専門家に分からせようと殆どしませんでした。私はコレクションを見せてくれた日にそのことを知りました。しかしハラミジョはどうでしたか？彼はロスタヨス洞窟につい

て自分が発したどの言葉も真実であるといつでも確信していましたか？私はキートに戻り、我々が洞窟探検の遠征に着手すると再び話し合った時、それを疑うようになりました。ハラミジョは世界の残りの人々と偉大な秘密を分かち合おうとすることに今では奇妙なことに口が重くなったのです。しかし、水晶の棺や金の骸骨についての彼の空想的な叙述は別として、少なくとも彼の話の一部は真実かもしれませんし、私は本能的に彼を洞窟に案内した二人のインディオ、**Samakache** と **Mashutaka** は実際存在するかもしれないと感じました。そしてハラミジョ夫人が不注意にも漏らした‘ペスカド’という地名は私の耳の中に鳴り響いたままなのです。伝説はいつもある基礎的な真実を持っています。ハインリッヒ・シューマンはこれを信念としてトロイの黄金の宝を発見したのではないのですか？**Samakache** と **Mashutaka** は謎を解く鍵でした。私は彼らを見つけようとしなければなりません。

## CHAPTER 9 ロスタヨス洞窟

おそらく強大なアマゾンのジャングルのどこかに住んでいる二人のヒバローインディオを私はどのようにして見つけることが出来たのでしょうか？エレーラ神父はいつものように助力する準備は出来ていました。彼はクレスピ神父への訪問を私が告げた時、何も意見しませんでした。しかし、ハラミジョの言っていたロスタヨス洞窟に関連づけて、私が本当に実在すると信じている二人のインディオ、**Samakache** と **Mashutaka** を探し出すという私の決意を聞いたとき、彼はその話に魅せられる様になり、「彼らのゆくえについて何か手がかりがありますか？」と尋ねてきました。「ハラミジョ夫人が会話の中で漏らした‘ペスカド’という地名と、ハラミジョ少佐の出生地ロハ及び彼が軍役期間中に根拠地にしてきたサモラがあります。」エレーラ神父は明るくなりました。「もしサモラへ旅行する計画を立てるなら、私の良き友、**Monsignor** モンセニョールはそこで聖フランシスコ修道会の長をしていますから、彼があなたを快く支援してくれると思います。私は無線電話で彼に連絡を取り、あなたが行くことを伝えましょう。」と彼は言いました。サモラへの旅行はクエンカに戻る必要がありましたが、その空港で私は以前 **Lova** 神父が紹介してくれた20代後半の若い男性オズワルド・オーラに会いました。私が到着して空港のターミナルに歩いていたところ、ぞろぞろと通過しようとしていた乗客や空港職員に感心を示さず、出入り口に堂々と立っている彼を見つけたのです。しかし、その彼はハンサムで背は低く、機知に富み、いつも自信に満ちた正にオズワルドその人で、ある意味、彼の血統であるかつてスペインの征服者が現代に生まれ変わったような男でした。彼は私のサモラ旅行に同行することを合意しました。

オズワルド・モーラ



彼は既に旅行用のジープを見つけていて、次の朝早くクエンカから約215キロ先にある最初の停車地ロハに向かいました。道は曲がりくねって、いくつかの山脈を越え、時々標高が三千メートルに届くこともありました。天気は快晴で、我々の周囲全ての空の中にぼんやりと谷や峰そして山頂が連なって見えました。花で覆われた広い坂は遥か下のほうへとさっと通り過ぎて行きました。埋立地の畑では冷たい風から身を守る重いポンチョを身に付けたその土地の小百姓が働いていました。時々、忠実なロバを従えた孤独な旅行者が我々の行く道を横切りました。あちこちにある標識を見て我々はインカ人によって数百年前に建築され、クスコを首都とするペルーの彼らの帝国に接続している古代のインペリアル・ロードの一部分の上を車が走っているのだと思い出しました。我々は正午前にロハに到着し、アンデス山脈の最も高い山塊、Villonaco の一つの斜面の居住地として1536年い創設された最も古い植民地の入場門を通り抜けました。

Pino の物語を確かめる為彼にインタビューしたスタン・グリスが撮ったオズワルド・モエラの写真。

我々が昼食のために立ち寄った小さなカフェの窓から、私はポンチョを着てつばの広い帽子を被った多数の Saraguro インディオが週一回の市場に来るため、馬に乗ったり、歩いて通り過ぎるのを見ることが出来ました。女性は髪をポニーテールにして、光っている金や銀の小さな装身具を身に付けキラキラ輝いていました。男性はなたを多彩で高価なベルトの鞘に入れてぶら下げていました。祝祭の日、彼らはグループで集まると、若い子牛をロープで縛り、その頸静脈を切って皿にその血を集めるのです。その後で、彼らはその生暖かい血と *aguardiente* という強い自家製のアルコール醸造物とを混ぜ合わせ、古代の儀式の一つとしてそれを飲み干すのです。考えてみると、四千年以上前、この同じ土地では *Westem Cordillera* のふもとの小丘にある *Rio Babahojo* の土手で発見された重要な遺跡の一つであり、小さな居留地の名前を取って *Chorrera* という名で今日知られている繁栄した文化の始まりが見られたのです。最初掘り出された時、この文化は多くの権威者によって海岸沿いの平地に起源を持ち発展してきたものだと信じられてきました。しかしながら、1943年、ドナルド・コリヤーというシカゴの自然博物館の館長がジョン・ムラと共同で、アンデス山脈の高地で発見された陶器の破片が *Chorrera* のものとある種の特性が著しく類似していると述べました。この証言は古代 *Chorrera* 人が南の高地、つまり *Alausi*、*Cerro Narrio* および *Descanzo* と呼ばれる場所にある *Eastern Cordilleras* と *Central Cordilleras* との間から降りてきたことを示唆していました。しかし、私が最も興味をそそられたのは *Chorrera* 遺跡がアマゾン盆地の低地に直接行ける川、*Rio Zamora* 川の土手の近くにあるロハの地域から発見されたことでした。さらに *Chorrera* の陶磁器は古来熱帯アマゾンの森に関係する要素、つまり今日でもまだ見られるインディオの伝統である耳のスプールを付けた人の小立像、掴むのに適している尾を持つ猿や熱帯森林の鳥そしてジャガ

一の彫像といったものを示しています。特に **Chorrera** 文化の工芸品は初期のエクアドル文化がアマゾン起源を持つのではないかという私の自説を堅固のものにしてくれているように見えました。もしもこんな文化的移住が起こったなら、千年間を通じて国の自然地形学は重要な役割を果たしていました。エクアドルで見つかった多数の川やその地域の多くには複雑な相互関係があります。火山岩あるいは沈積岩から成り立っている国の殆どは水を保つのがとても乏しく、山地の多い国では大部分の雨が地面に染み込まず、流出してしまいます。このため、氾濫した川は山の塊であるアンデス山脈と西にあるアマゾン川そして東にある海岸沿いの平地を通して大きな水路と深い溪谷を刻みました。これらの水路はアマゾンからメサに、またメサから海岸沿いの平地へと至る自然な道筋を供給することができましたか？このような道筋なら北には大きな **Rio Napo** の支流である **Rios Aguatico** と **Coca** によって、中央にはマラニョン（アマゾン川のペルー側の主要部）の支流である **Rio Pastaza** によって、また南には **Rios Napo** やマラニョンの様に、大きなアマゾン川の部分になる **Rio Santiago** の支流である **Rio Zamora** によって、**Central Cordillera** へ供給できるかもしれないと私は推論しました。従って **Oriente** からメサにかけて三つの大きな回廊がありますし、他はもっと小さいながら、至る所に川が作られています。南米大陸で作られた最初の陶磁器の出現はエクアドル南部の太平洋岸低地で繁栄したバルディビア文化の始まりと関係がありました。しかし、**Chorrera** からはとても複雑で壮観な伝統を持つ陶器が出現しました。それらは凝った飾りを施した陶磁器の容器、口笛のような音の出る瓶、あぶみの瓶そしてもっと進化した技法で塗られた虹色の陶磁器で、ペルー、コロンビア、グアテマラそしてメキシコの文化よりもっと早い時期に **Chorrera** に現れたのです。**Chorrera** 文化はアンデス山脈のふもとの小山から海岸沿いの平地に至るまで南北にも広がっていきました。そして **Chorrera** の小立像と陶器の文体の特徴は少なくとも千年後にコロンビア、北はメソアメリカ、南はペルーにかけて繁栄した文化の工芸品に見られます。しかしまた **Chorrera** の起源はどこだったのかという疑問が生じました。また、こんな高度に発展した領土拡張社会はどのようにして自活していたのでしょうか？こんな文化を支えることが可能な唯一の作物は高生産の主要産物である、とうもろこしですが、まだ **Chorrerade** でとうもろこしを栽培していた証拠を見つけた研究者はいません。おそらく **Cordillera** か、あるいはアマゾンのもっと東のどこかにその両方の質問の答えが見つかるかもしれないと私は考えていました。昼食後、オズワルドと私はハラミジョの出生地ロハをしばらく見てから、54キロ離れたサモラに向け出発しました。地方の首都としてサモラは地図上、顕著な地理的記号で示されています。実際、そこは猫と犬を含めて総人口1300人の国境の町で、最大のビルが聖フランシスコ修道院です。サモラを目立たせているのはそこがアマゾン盆地への大きな運河のひとつである **Rio Zamora** の上流に近い場所であり、**Oriente** への南の出入り口だということです。オズワルドと私は直接修道院に行きましたが、そこでエレラ神父の友達 **Monsignor Maschera** が我々を歓迎してくれました。私はできる限り簡潔に **Samakache** と **Mashutaka** という二人のヒバローのインディオを捜

していると説明し、彼らの事やペスカドという場所を聞いたことがあるか尋ねましたが、彼は聞いたことが無いと答えました。しかし彼は1956年頃ハラミジョという将校がサモラに軍隊と一緒にいた確認している修道会の病院の若い医者、イマニュエル・ガルボのところへ行って見るようにと私に勧めると同時に、病棟の一つにスペイン語を話すヒバロー女性患者がいるとも言いました。私は彼女に質問したところ、彼女は Rio Cumburatzza の海岸で、サモラの北東30キロにペスカド（スペイン語で‘魚釣り場’）と呼ばれる居留地があると言いました。また彼女はサモラと Gualaquiza の中間にあつて、Rio Bombaiza を横切った小さな居留地 Los Enquentros におそらく住んでいる Samakache という名前のヒバローの男のことを聞いたことがあるとも言いました。私は彼女の返事に元気付けられ、Monsignor Maschera に供給してもらったヒバローのガイドと共に翌朝、オズワルドと私は Los Enquentros に向けて出発しました。最終的に我々のヒバロー収容所への旅は険しく泥だらけの道跡を残すほどの困難で挫折の連続の旅でした。ちょうど我々がそこに到着する前、ガイドが暫くの間立ち止まるように言って、一連の調整された信号を口笛で吹きました。数秒後に、返答の口笛が茂みの中から聞かれ、それは我々が進むことができるということを示していました。自分の意図が何かしらの誤解を受けないように居留地からある距離に来たら自分の存在を知らせることは非常に重要なのです。ただ、Samakache はこの居住地には住んでいませんでした。彼はほんの一週間前にサモラの方向に約20～25キロ戻った小さな居住地 Ansasa に行ったことを知りました。さらに彼が Mashutaka のような大きくなった息子を持つほどは年をとっていない若者であることも聞きました。そのことが私を不安な気持ちにさせましたが、おそらく年老いた Samakache の家族の一員であるかもしれないと思い、彼がロスタヨス洞窟について何か教えてくれるだろうとまだ希望を捨てていませんでした。オズワルドと私は気をくじかされ、同じ泥だらけの道跡を引き返しましたが、疲れたり失望させられたりで、サモラに着いたのは太陽が Sabanilla 山脈の後ろに沈む頃でした。翌朝、我々は何とかして Samakache の問題を解決しようといらいらしながら、Ansasa に車で出かけました。そこから我々は Rio Zamora 川の土手に向かい、カヌーで二人のインディオと一緒に渡り、そこから Samakache が住んでいるといわれている高い土地へと続く狭い道跡を辿る別の徒歩旅行を始めました。30分後ヒバローの小屋がある開拓地に近づきましたが、Samakache はそこにもいませんでした。我々は彼が別の居留地に住んでいると言われたので、違った道跡に行くことにして、荒れ狂う山の川を越え、小さな丘の上を登ると、別のヒバローの小屋が見えました。我々がそこに近づくと、小屋の前で立っていたのは Samakache でした。しかし彼は Samakache の別人だったのです。彼は Mashutaka のことを聞いたことがありませんでしたし、他にも息子の名を Samakache にした人もまた知らなかったのです。彼は我々に Samakache とは単に‘執念深い蛇’を意味していると言いました。Mashutaka は‘賢いもの’‘強いもの’を意味していて、両方ともヒバロー戦士の戦う時の名前によく使われたのです。彼はペスカドで以前暮らしていたと言いましたし、ペスカドが魚の豊富な川に沿った場所ではとてもよくあ

る名前であることも知りました。今回は大きな期待はずれでした。オズワルドと私は疲れてサモラに戻りました。ハラミジョ少佐のロスタヨス洞窟の話について何か確証を見つけることができるかもしれないという私の期待は完全に打ち砕かれました。どう見ても私の旅行は失敗に終わったのです。それに関するすべてのものは私がさらに洞窟探索を追及する確実な理由が無いことを証明しているように見えました。しかし、私の知らないところで運命は正に自然な形で無理やりまた私の探索を再開させようという出来事を既に準備し動かしていたのです。数ヶ月の後、1969年の9月に私は不可解で未知の領域へとビックリしたことに戻りました。私はオズワルドから突然の電話を受け取り、直接マイアミからキートへ、そこから彼が待つクエンカの空港へと飛びました。私の旅の理由は一日遅れで再版したクエンカ新聞にキート新聞の記事が載っていたからで、それは **Oriente** 地方のアンデスの三番目の山脈に‘ロスタヨス洞窟’という大きな一連の洞窟を発見したという記事でした。この発見を発表した人は **Juan Moricz** で、私はすぐに彼の名前を思い出しました。アンドレア・サルバドールは最初ハラミジョのことを私に話した時、**Moricz** というアルゼンチン人（元ハンガリー人）が奥地のインディオ伝説を探查することに興味を持っていて、彼もまた少佐の話を知っていたと言っていたのです。私は今思うに、おそらく彼はハラミジョからもっと情報や手がかりを得て、とうとう洞窟を発見することが出来たのでしょう。その記事は続けてロスタヨス洞窟はアンデスの東の山脈の斜面の荒れ果てた地帯にあったと書いてありました。またそれらは多くの平らな石作りの都市の一部で、通路とトンネルがおのおの水平に相互接続されていて、現存する石の壁は不可解な銘で完全に覆われたブロックで建てられていたということです。その場所はヒバローインディオに‘タヨス’と呼ばれている希少種の鳥が住んでいる所で、残骸が周りのジャングルの深いところに拡がっているとされていました。その発表で **Moricz** はその発見の意義について私見を述べていました。つまり、彼はこの失われた都市には現在チベットに住むラマ僧の先祖と言われている **Vera** という不思議な民族がかつて居住していたと信じていました。私にはそれが多少空想的に思いましたが、もしも洞窟の記述が真実ならば、1911年にヒラム・ビンガムによってペルーのアンデスで発見されたマチュピチュという山の上の石作りの都市と確かに同じくらい重大で意義深いものであったでしょう。下町のクエンカにある‘**EL Correo**’というカフェに座りながら、オズワルドが教えてくれた **Moricz** の発表がきっかけとなって私は噂や推測そして興奮で一杯になりました。政府高官は懐疑的だが、議論は様々な省において進行中で、公式な調査が開かれる可能性はありうると彼は言いました。それが彼の緊急招集の理由でした。彼は私が洞窟調査の意義を確定したいなら、我々はすばやく行動に移さなければいけないことを知っていました。一旦政府がその調査を始めたなら洞窟には部外者が入らないよう非常線が張られるのは確実でしょう。我々はそれがどんなに困難なものになるか分かっていましたが、すぐに旅行をすることに決めました。しかし、私は **Oriente** に旅行のための許可を得るため、南軍事地帯の陸軍大佐アントニオ・モラルに会わなければなりません。記事によれば、洞窟はペルーとの境界線近くに位置し、

この地域では特別な許可が無いと旅行は許されなかったのです。モラル陸軍大佐は **Teniente Ortiz** にある軍事駐屯地の指揮官に、我々が洞窟の地域を探検するのに良いぎりぎりの地点を用意するという紹介状も与えました。そして準備をしなくてははいけませんでした。というのは **Teniente Oetiz** はとても小さな遠隔の軍事前哨部隊だったので、我々は必要な食料、備品、生活用品全てを運び込まなければいけないからでした。そこに到着する最も良い方法は小さなセスナ機を借り、その地点の近くにあるジャングルを切り開いた滑走路に着陸することだと我々は決定しました。他のルートとして陸路と水路、つまり道と丸木舟のカヌーを使うものがありました。しかし、それは少なくとも10日間の行程で、時間があまりにも押していました。**Ortiz** の滑走路の我々を運んでくれる小さな飛行機のパイロットを見つけるという仕事はとても困難でした。というのは、その飛行は危険なものだったからです。小さな飛行機でクエンカと **Teniente Ortiz** を分割している中央アンデス山脈を飛ぶことは不可能です。飛行機はこの時期通常雲がかかり、視界ゼロの山の頂上の間を通行するという飛び方をしなければなりません。そのため、ここ何年も多くの飛行機が操縦を誤って山腹に衝突しており、晴れた日ならむき出しの岩に飛行機の残骸がねじれてばらばらになっているのを見ることができます。我々はとうとう **Teniente Ortiz** へのルートにとっても精通しているパイロット、フリオ・オルテガを見つけ、彼は天候がよくなればすぐにオズワルドと私を乗せて飛び立つと約束しました。ついに我々は空中輸送されて台地の床の上に浮かび上がった時、下界の光景は圧倒されるものでした。澄み切った朝の光を受けてアンデスの未開の美しさは素晴らしかったです。巨大な山頂が我々の前に立ち上がり、と同時に急に、全ての方角から我々を取り囲んでしまいました。オルテガは上手く操縦して山間の通路と深い峡谷を通って行きました。そこは雲がどの地点にもかかり、災害を招きやすく、最も熟練したパイロットのみが生き残る場所なのです。我々が下にある **Ortiz** の着陸滑走路を見ると、そこは背の高い密集した木々に囲まれた小さな庭地のようでした。私はどのようにしてオルテガがこんな短い滑走路に飛行機を着陸させることができるか想像できませんでした。しかし彼は木々の先端すれすれを沿うように飛んで、石のように地上から数メートルのところ落ちてバウンドしながら着地しました。と同時にセスナ機を滑走路のはるか終点の木々から5メートル以内に止めました。**Ortiz** に軍事駐屯地の将校は我々の到着にあまり興味を示しませんでした。クエンカのモラル陸軍大佐からの紹介状があったにも関わらず、彼には見知らぬ人の手助けをする時間が無かったのです。たぶん我々が所持品全てを持ってサンティアゴ伝道団体へ北数キロ歩くことができれば、そこにいるサレジオのブラザー達が二人の白人の外人を親切にもてなしてくれるだろうと彼はほのめかしました。我々は彼の提案を受け入れることを決めましたが、幸いにもそこではまたとても異なった歓迎を受けました。担当のブラザーであるフアン・アルコースは大きな笑顔で我々を歓待し、すぐに我々の滞在の便宜を図りますと申し出てくれて、何かできることがあれば何でもしたいとも言いました。ブラザーのアルコースは **laico** という僧職の修行をある期間行ったカトリックでしたが、それを終えずに今では別の能力で教会の

ために仕えていることを知りました。彼はメスティーン語を完全に話し、およそ25年間も奥地の布教のために働いてきました。彼は若いヒバローの助けを借りて、**Rio Santiago** の土手にこの伝道団体を建てたのです。ブラザーのアルコースはヒバローと同じくらい周囲の地形をほとんど熟知しており、洞窟があると思われる場所に到着する最も良い方法は **Cordillera Cutucu** から南に流れている小さな急流、**Rio Coango** に出会う場所までカヌーで下ることであると我々は決定しました。そこから我々は徒歩でロスタヨス洞窟があるとされる西の斜面のひとつ、**Cordillera Catucu** の中の山道を歩き続けなくてはならないでしょう。ブラザーのアルコースは我々に、川下りを行い再び洞窟から戻る時に乗せてくれるカヌーと二人のヒバローのガイドを提供したいと申し出てくれました。しかし我々は川から **Cordillera** に歩いていくインディオのガイドをつけることはできないでしょう。それはある理由で軍がその方面にインディオが旅することの禁止令を出したからです。我々はその日の残りをブラザーのアルコースとインディオたちから予定のルートについてできる限り学び、道中のための所持品を準備することに費やしました。翌朝、空は快晴で、カヌーに荷を積み入れて、好天気を利用するため我々は急いでそれに乗り込みました。インディオたちはカヌーを伝道団体の栈橋から激流に押し出し、午前半ばまでに我々は **Coango** の接続地点に到着しました。インディオたちは懼にもたれながら、カヌーを川の左の土手に滑るように進ませて、そこで我々は上陸し所持品を降ろしました。我々はガイドにさよならを言い、土手に荷物を置くと、この地点から **Cordillera** に行けると思われる山道を探し始めました。しかし見たところ道はありませんでした。とうとう私は木々と密集した草木の間に山の側面を垂直に上がったかすかな獣道を発見しました。我々はそれに従っていくことを決心しましたが、その登頂は恐るべきことだとも分かっていました。その泥はとても滑り易かったので、我々の足は歩くごとにずり落ちました。ちょっとでも前進するために、私たちは木々や大量の草木を掴んで自分自身を引き上げなければいけませんでした。我々はその日遅くその山道まで到達しようとしていましたが、山腹上で夜を過ごすことを強いられ、その道に着いたのは翌日の午後でした。毎時間自分の体を引き上げたり、一度に数歩ずつだけでもこの泥だらけの獣道を登るという肉体的苦痛を記述することはとても難しいです。それは疲労した筋肉の痛みを超えるもので、最初に緊張と疲労の状態になった後、残酷なずきずきした痛みになり、心臓がねじれるような鼓動が起こる度にそれがどんどん酷くなってきました。我々は意気込みだけ、つまり登りきれば、我々を支えているあの洞窟を見つけることができるという意志だけは持ち続けていました。我々がとうとうその山道に到着した時、体が回復するのに少しの間崩れ落ちましたが、次にどの方向に行くか考えました。我々は洞窟の正確な場所を知りませんでしたから、選択をしなければなりませんでした。私は我々が獣道を辿って行くべきだと決心しました。というのは私にそれが最も洞窟を見つけやすい地域に導いてくれるという直感があったからです。もう一時間かそこら後、山道にほとんど光が無くなっていましたので、我々はその夜を過ごす場所を探し始めたら、急に我々の左側の山の暗い影を背景に、私は焚き火の光

を見ました。インディオのキャンプ？軍事パトロール？もしそうならば、エクアドルかペルーのものでした。分からなかったけれど、我々の疲れた心と体にとって、その明かりはとてつと誘惑的だったので無視することはできませんでした。我々はいちかばちか行ってみることにして、その方へ歩き始めました。我々はその焚き火に近づくと「Ola!」という厳格な声がしました。「Ola!」とそのやり取りで私が呼び返したら、我々の前に三人のグアヤキル警察 (Policia Civil) 官が立っていました。オズワルドと私は彼らが警察官であったことに驚きました。彼らはエクアドルのこんな遠いところで何をしているか尋ねたので、我々はそれを説明した後で同じ質問を彼らにしたところ、彼らはロスタヨス洞窟を見張る命令を警察の **Commandante General** から受けたのでここにいるのだと言いました。我々はこの洞窟を一生懸命捜し求めるのと同じくらい、それを実際まさか見つけることができるとは思っていませんでした。兵士たちは我々に彼らの野営場に加わるように勧めて、自分たちが翌朝到着するインディオのグループと一緒にヘリコプターの上陸場の準備作業をするためここに派遣されたのだと言いました。約一週間後に洞窟を調査するため政府高官と軍事部隊が飛ぶことは予定されていました。オズワルドと私はお互い顔を見合わせ、その瞬間、何と我々は彼らより先にそこへ到着できる幸運を持ち合わせていることに気付きました。私はパトロールのリーダーであるスピノザ軍曹に洞窟に関して尋ねましたが、彼が知っている限りでは唯一つのことを知っているのが分かりました。それは不可解な銘を持った石の壁やジャングルの周りには残骸は無いということでした。明らかに **Juan Moricz** の発見の記述は大きく誇張されていました。それでもまだ、私は洞窟の入り口を見たいという衝動を我慢することができませんでした。スピノザは私をそこに連れて行くことに申し出たので、我々は松明を灯して、新たに切り開いた道を降り始めました。数分後、あの有名な洞窟があったのです。しかし印象深いものではありませんでした。洞窟は地下深くにあるし、山の壁にある入り口は変な形をした井戸か大地に開いている深い穴あるいはたて坑のように見え、一部は岩の突き出しに覆われ、藪、木々そしてつる草に囲まれていたからです。私は入り口の方に光を照らしましたが、何も見えませんでした。たて坑は暗闇に消えていました。ただ見えるものといえばその側面から突き出た岩だけでした。基本のプラットフォームはスピノザと彼の部下によって入り口近くに作られており、ロープとケーブルがたて坑に下されていました。我々が野営に戻った時、スピノザは内務大臣の許可無く洞窟に入ろうとする人を取り締まる命令を下していると言いました。我々は許可書を彼に提示し、洞窟に下りることを認めるよう頼みましたが、彼はその許可書にはっきりと我々が洞窟に入ることができるとは謳っていませんでした。しばらくはこれ以上何も言われませんでした。オズワルドと私は荷物からいくらかのコーヒーとコンデンスミルク、いわしとマグロの缶詰、**trgo** のボトルを取り出し、スピノザと彼の部下のもとを訪れて、夕食を共にしました。食事中、オズワルドはスピノザと会話を始め、すぐに彼にクエンカの親戚がいることが分かりました。彼らは共通の知人の話題を交わしたり比べたりして意見を述べ始めましたが、とうとうオズワルドはスピノザから信頼と友

情を得てしまいました。その夜の終わりまでに我々は了解が成り立ちました。我々は洞窟に入ることは認められましたが、スピノザや彼の部下の援助は受けられず、カメラも後に残さなければなりません。翌日、雨が我々の洞窟への降下を遅らせましたが、オズワルドと私は我々が直面している事態を評価することができました。我々は洞窟の入り口に下がっているケーブルとロープが上昇下降を楽にするある種の滑車に繋がっているのが分かりました。そしてたて坑の中をじっと見ていると、洞窟の奥底からはっきりしないささやき声が聞こえてきました。それはこの不思議な地下世界の住人、何千というタヨ鳥がクークーと鳴く音でした。翌朝早く我々は再び洞窟の入り口に立ちました。私はオズワルドと握手し、胴の周りに命綱をくくりつけ、入り口の端にかがみこみ、両手でケーブルをつかんで、たて坑に自分の身を下ろしていきました。わずか50フィート下りたところで、日の光は私の頭上でただの小さな光輪になってしまい、正に私は暗闇の中を降下していたのでした。私は背筋がぶるぶる震えるのを感じました。下に何が横たわっているのか知っている人はいましたか？私は両手を非常にしっかりとケーブルに巻きつけていたので、ずっと両腕に沿って痛みを感じていました。初めは幅が狭かったたて坑はだんだん下りるにつれ少なくとも50か60フィートにまで広がっていました。私はベルトに下がっているライトを持ち、スイッチを点けましたが、たて坑の周囲をそれで直接照らすことはできませんでした。私はあえてケーブルから手を離そうとはしなかったからです。ゆっくり私は降下し続けました。その時、私の頭上で私が手に握っているケーブルを揺さぶり動かしていたのはオズワルドでした。数秒ごとに彼は「底に着きましたか？」と叫んでいましたが、いつも答えは「まだです。」でした。最終的に私は約200フィート下りて、底に着いたと思います。そしてライトが何かを照らしました。見下ろすと、それが水であることが分かり、ぞっとしました。もしそれが地下の深い川であったなら、着地することは不可能であることは知っていました。祈って、私は水に足を入れ、ちょっとだけ自分の体を下に下げると、底に着きました。水は私のちょうどひざの下に達していました。私は大きくほっと一息をつき、ケーブルを放すと、血液を再び循環させるため両手を曲げました。見上げて、オズワルドに「今私は底にいます。」と叫び声を上げました。オズワルドはさっそく底まで下りて来て私に合流しました。ケーブルに二つの自動的に明滅するライトを取り付けた後、我々は水から出て数メートル坂を上がるとライトの光の後に続きました。その時、我々が今どこにいるか確かめるため立ち止まって周りを見回しました。我々二人とも可能な限り深く息を吸い、まるで何マイルも走ったかのように汗をかいていました。我々が降下中に、洞窟に住んでいる何百羽というタヤ鳥が我々の周りをキーキーという鳴き声を上げながら飛んでおり、その燐光を発する目は暗闇で光っていました。鳥たちは見知らぬものが自分たちの領地に侵入することを嫌がっているようでした。さて我々は岩に座り見上げると、鳥たちが矢のように飛んでいる影がたて坑の入り口から洞窟に差し込んでいる微かな光を横切っていました。私はこの地域のヒバローにとってタヤ鳥が単なる鳥でないことを知っていました。ヒバローは太古の昔からそれらを捕まえるため、この洞窟の暗闇の



中に年に二回、下りていったのです。その鳥の脂肪は彼らの食養生法にとってとても重要な部分で、やがてこの年二回の捕獲は歌ったり、太鼓を叩いたり、そして種族の **brujo**（魔法使い）による洞窟とジャングルの精霊に対して祈るといような神聖な儀式に発展しました。この洞窟がインディオにとって神聖な場所と見なされた理由が私には明らかでした。オズワルドと私は洞窟の周りをライトで照らしました。大きな石筍、石のブロックそして大量のタヤ鳥の糞が目に入りました。かたわらにある天然の梯子はこの暗い世界に人が存在したことを証拠していました。明らかにヒバローが洞窟の壁の割れ目に住んでいるタヨ鳥に手を伸ばすためそれを使ったのです。用心深く、我々は瓦礫の間を前に進みました。何とかして、我々は巨大な部屋に入ったことに気付きましたが、光が強く無いため十分その大きさを明らかにはできませんでした。この部屋の入り口は驚くべき光景でした。どっしりとした正方形の石で建てられた巨大な入り口のように見えたのです。それはまるで競技場の入り口のようにあり、ここでタヨ鳥のキーキーという鳴き声がますます激しくなりました。部屋の床は平坦ではなく、上から落下した大小とりどりの石と岩で覆われていました。その時、滝の音が聞こえてきましたが、我々はたて坑の底で出くわした水の水源地がそこからであったことが判明しました。我々が部屋の内部で感じた空気の動きもそれで説明できました。用心して我々はそれに近づき、不意に切り立った壁が我々の道をふさいでいるのが分かりました。今の音は上から聞こえていたのです。その方角にライトを向けると、我々の上高いところにトンネルの入口が見えました。我々がこの巨大な洞窟が異なった高さに多くの入口を持っていることに気付いたのはこの時でした。それらは全てどこに繋がっていたのでしょうか、他の部屋や洞窟でしょうか？例の修道院で、ブラザーのアルコースは「インディオたちは地下に20～30キロ続く洞窟があると信じています。」と私に言いました。我々は他の地下の部屋への通路をライトで照らしながら進み、一心に人の住んでいた証となるヒエログリフ、岩の彫刻、木炭そして彫刻あるいは建造した痕跡を探しました。しかし何もありませんでした。ただ、部屋の一つの片隅に大量の花崗岩があり、おそらくおのおのが切り取られたように見え、重さも数トンのものであったでしょう。あるものは正方形、あるものは長方形で、それらの一方の側には祭壇に似ている岩が露出していました。私はこれらの大きな岩を注目すべきものとして感銘を受けました。というのはこの正方形の角や完全に水平な側面が自然に生じるなんて不可能に見えたからです。しかし、私は人が作ったようなものが部屋のどこにも全く存在しないので当惑しました。再び私は **Juan Moricz** の洞窟発見の記事を思い出し、彼の想像力に驚嘆しました。ここには伝説上の石の地下都市を示している、人の建造物あるいは住居はありませんでしたし、この地下にかつて不可解な古代文明があったと認識できる証拠は存在しませんでした。オズワルドと私には多くのトンネルや部屋全てを調査することは不可能でしたが、私は既に見てきたもの以上のことを発表するつもりは無いと強く思いました。私は洞窟が完全に自然に現れたものだとは確信しました。それは信じられないほどの大きさを持つ地下の穴でしたが、その神秘性はおそらくヒバローのタヨ鳥に対する崇拜の念によって作られたのでした。

我々はケーブルに取り付けられた自動的に明滅するライトの方へ来た道を引き返しました。最初にオズワルドが、次に私が地上へと上りました。スピノザ軍曹は我々の顔を見て安心しました。我々はこの冒険でへとへとになりながら、野営場に帰って火の回りに腰を下ろし、軍曹と彼の部下に見たことを話しました。私はこの洞窟に古代人の何か確かな証拠は存在しなかったし、単に自然が作り出した顕著な例であると言いました。スピノザはここから約20キロ離れた **La Esperanza** と呼ばれる地域にインディオがロスタヨス洞窟の入り口を正確に記していると信じているペトログラフが刻まれた大きな丸石があり、**Zukma** という地域のヒバロー **brujo** (魔法使い) は自分の顔と同じ **glyphics** を刺青していると言いました。私はおそらくこれらが洞窟内部で見られたとして新聞報道された‘不可解な銘’ではないかとすぐ心に浮かびました。間違いなく小さい誤りをしました。オズワルドと私は野営場でその夜を過ごしました。翌日我々は山道へと登って引き返し、そこから **Rio Santiago** に下り始めました。我々はこれが三日前にあんな信じられない困難さを提示していた同じ山だとは全然信じられないほど、非常に早く下りて行きました。それは土に泥があるにもかかわらず、単にバランスの問題であり、スキーで斜面を下るようなものでした。我々は薄暮れてから修道院に到着し、川の冷たい風呂と友人であるブラザーのアルコールによる美味しい食事の後、生き返ったような良い気分を感じました。二日後、天气が晴れて、フリオ・オルテガは小さな **Ortiz** の滑走路に別の着陸場を上手く作りしましたので、我々はクエンカに戻るセスナ機に乗り込みました。雲は **Central Cordillera** の峡谷や山道のいくつかの中に形作られていて、空の旅はぞっとするようなものでした。やっとクエンカに到着した時は雨が降っていたので、我々は無事に地上に戻って来ることができて、とても幸運だと感じました。空港の保守ビルの前に車を止めて、そこで我々はロスタヨス洞窟を調査するため約一週間の間 **Oriente** に政府の役人たちを乗せていったヘリコプターを見ました。我々にとって冒険は終わりました、少なくとも今のところ。しかし他のところではまだ始まっていませんでした。後になって私は、探検と岩のサンプリングの設備を持つ地質学者を含めた長期にわたる政府学術探検の報告の中で、ロスタヨス洞窟は異常な地質形成物に他ならないと知りました。あの中央の部屋にあった大きな石や入口は人では無く、水や地震によって彫刻されたものだったのです。洞窟の公式調査では我々のもののような何か人の作ったものやあるいは住居の証拠は無かったのです。私の **Samakache** や **Mashutaka** の搜索およびロスタヨス洞窟の探検は全く実りの無いものだったのでしょうか？私はそうは思いませんでした。ロスタヨス洞窟はアンデス山脈のジャングルに隠された地下洞窟の存在を証明することに他ならなかったのです。確かに私はハラミジョ少佐、クレスピ神父そして **Juan Moricz** のような人物の空想を疑って聞いていました。しかし、インディオの神話や伝説には真実の断片があると確信したままです。私は **Oriente** が古代文化発展に貴重な証拠をもたらすとまだ確信しています。私はそこの調査を続行しなければなりませんでした。

Pino Turolla と彼の著作「アンデスを越えて」についてのエンド・スタン・グリスの意見  
およびコメント

徹底的な調査と旅行そしてオズワルド・モーラ（Mishu）と Pino の未亡人である Renee  
Turolla へのインタビューの後で、私は Pino Turolla と彼の著作についていくつかの個人的  
な結論に至りました。

Pino のロスタヨス洞窟の調査はあまりにも短すぎたので、調査中の彼がこの本の中であら  
わすような結論を引き出すことはできなかったと私は思います。彼は水面下にある、洞窟  
の秘密の入口を今まで知っていましたか、それとも忘れていましたか？私もまた、彼の著  
作で見つけた真実への他の拡がりのふたを取り去りました。洞窟で ‘Los Monos Grandes’  
に遭遇する彼の話は彼の以前のアシスタント、オズワルドによってすっかり反駁されてい  
ます。しかし、私は彼の著作にある情報の多くはユニークで正確で、彼の志を継ぐ将来の  
調査者に役立つものだとも信じています。

以上

3 J・ゴールデン・バートン著：「古代エクアドルの失われた黄金『古代アメリカ・マガ  
ジン』からの抜粋」

Juan Moricz はハンガリーで生まれ、アルゼンチンに帰化していますが、1969年7月  
21日、エクアドルのグアヤキルにある公証人に法定権利証書を預けました。彼は196  
5年に全く偶然発見された多くの洞窟、トンネルそして古代の工芸品に関して法的な保全  
要求をしたかったのです。その時、彼はアマゾンに接するエクアドル低地のジャングルに  
金を試掘していました。彼は採鉱業に加え、アマゾンのインディオの文化や歴史にずっと  
興味を持ち続けているアマチュア考古学者でした。彼はエクアドルとペルーの下に数百マ  
イルもの地下トンネル網を発見し、それがボリビアまでもうペルーのアンデス山脈に届く  
位延びていると主張しました。彼はそれが歴史や科学で知られていない古代の失われた文  
明のものだと信じていました。少なくとも地下洞窟の一部は地下の川床が干上がったもの  
ではないかと推測しました。Moricz は自分が発見した工芸品、つまり明らかに古代に存在  
した多くの遺物と一緒に、記号と奇妙な文字が彫られた石造物、金属板そして大きな装飾  
板についてエクアドル政府に法的な管理を請願しました。彼はまたその遺跡が考古学的に  
正しいと検証する科学的委員会に自分を参加させるようにとの約束を要求しました。しか  
し、彼の要求に回答はありませんでした。次の10月、彼はブエノスアイレス政府に連邦  
密使の援助を求めるテレックスを送り、自分の国は彼が発見した考古学的宝を受け取っ  
てもよいことを示唆し、アルゼンチン当局とそのどんな発見をも共有する意志があると宣言

しました。しかし、ここでもまた彼は決して返事を受け取れませんでした。今から2年前、フリオ・ホイエン・アグアードはモルモン教徒の教会の使徒代表レックス・N・テリーに彼の同国人の苦勞話をしました。その発見者の親友として、アグアードは直接彼のフラストレーションを知っていたからです。その話に興味をそそられて、テリーはMoriczを長老のスペンサー・W・キンボールと共に南アメリカ諸国から使徒代表が集まるウルグアイのCurrsoで行われる会合に招待しました。Moriczはその招待を受け入れ、彼の奇妙な発見について講義をしました。彼は後になって次のように思い出しました。「キンボールは私にとっても興味を持ち、地下の洞窟やその遺物を発見するためにどんな援助や支持でも申し出てくれました。宗教と哲学についてほんの暫く話した後で、彼は私にその当時エクアドルの使徒代表である長老のAvril James Jespersionを紹介しました。私はキンボールがとても好きになり、本能的に彼が正直な人だと知りました。(スポンサーになった)モルモン教徒に遠征は認められ計画されました。」会合の後で、Moriczはエクアドルに戻り、翌年の2月にアグアード氏からJespersion代表の下でこの冒険的事業を準備するためエクアドルに来ているという海外電報を受け取りました。アグアードが到着した時、彼とJespersionはMoriczに遺跡踏査のための全ての準備ができていると告げました。Moriczは次のように思い出します。「私は二回あるいは三回も探検を続ける考えが無いのか、それともあるのかを告げられました。私はこの挑戦を受け入れました、というのは彼らが健全な人々であると信じていましたし、偉大な主唱者キンボールに最良の印象を持っていたからです。そこで私は『何故いけないのですか？何度でもやってみましょう。』と言いました。我々はキート(エクアドルの首都)に行き、当時ファースト・ナショナル・バンクの総支配人であるロバート・ウェルズ氏を通して遠征の融資を手配しました。私は彼らに探検旅行を始める場所メンデスで会いましょうと言いました。」こんな旅行はジャングルで最低7日は必要になるでしょうが、ウェルズはそんなに長く銀行業務の義務から離れる用意をしなかったため、彼と彼の息子ロバートはこの計画から離脱しました。その間、JespersionはMoriczがメンデスの村を良く知らないことに気付きましたし、その問題の地域を熟知しているかどうか疑問に思っていました。Moriczは確かに心配して洞窟のありかについて全ての知識を保護するための一部として、彼の後援者たちにこの冒険的事業を控えめにする必要があることを痛感させていました。変におそらく彼もまた近くに住んでいるヒバローインディオを本当に気遣っていたのかもしれませんが。なぜならば、彼らは彼のような神経過敏なガイドを全く信用していなかったため、以前Jespersionとウェルズは仲間が敵対している全く知らない地域を旅行している間、少なくとも安全な方法で外部の世界と接触しながら探検を続ける秘密の暗号を実行したことがありました。可能ならいつでも、Jespersionは秘密裏に彼らの進行状況と位置を報告するためウェルズに打電しました。その暗号は不確かな状況下では慎重な必需品に見えました。不幸なことに、彼らは既に疑い深くなっているMoriczがその暗号の論議を立ち聞きして、彼の背後で行われている彼らの陰謀を裏切りだと見なしていたことを知らなかったのです。ただ彼は後になって約束の不履

行を許してもらうため彼らの秘密の取り決めを使いました。彼の言葉で言えば次のようでした。「彼らは飛行機で行き、私は車で後をついて行きました。我々は指定された場所で会い、この時までに最低でも500～600ドルは費やしていました。彼らはその時3本か4本の銃を買いました。飛行機を借りるのにいくらかかるのか、私は知りません。しかしメンドスで私は非常に不愉快な驚きを経験しました。私はその時点で地下洞窟を発見した場所を明らかにしていませんでした。私は自分がその地下の部屋の情報を漏らした人に対しとても注意していました。私は平気で悪事をする人々がその貴重品を盗むことを心配していましたので、彼らを正しい場所に連れて行かず、むしろジャングルを通る面白い旅行に連れて行ったのです。それで私は馬に乗せてやりました。お陰で Jesperson は約7キロ体重が減ったので、とても調子が良さそうに見え始めました。良い旅をして、我々はいくつかの洞窟や、川には早瀬もまた見ました。それは全てとても素敵なものでしたが、彼らが望んだものではありませんでした。私は彼らを circles に連れて行きました。最終的に私は彼らに銃を置いていくように言いました。彼は他人に金を使うことはとても簡単であると言って、とても混乱するようになりました。このことが軍事キャンプの前で起こったので、皆をとっても驚かせました。しかし私は非常に気分が悪かったので、そんな混乱を乗り越えることは些細なことでした。その時、Jesperson は困ったことに記念品を買おうとしていました。彼が熱心に取引している姿は私にとって彼が探検にとって良くないことをする人であることを示唆していました。結局そのグループは解散し、私は決して再びその発見場所を誰かに打ち明けないようにしようと決意し、もっと賢い人を探すことに戻りました。」彼の調査の結末として、カトリック聖職者クレスピ神父が保管している中に預けられた Moricz の発見したもの全てを写真に収めるため、エクアドルに Cheeseman が来ることになりました。Cheeseman によって作られた写真と報告書の結果、ピーターソンもまた Moricz の記事に彼自身だけでなくモルモン教会に代わって、再び新たな興味を示し始めました。ピーターソンは既にエーリッヒ・フォン・デニケンによって作られた「古代宇宙飛行士」論に影響されていました。ピーターソンはその発見がエクアドルでのものだと申し立てられているのだから、有名な Gold of the Gods の著者による主張を調査すべきであると言いました。しかしピーターソンはキンボールに委任された最も初期の遠征に関して何も私に意見することはありませんでした。1975年、Cheeseman 博士、ソルトレーク・ヴァリーからの二人の友人そして私は自分たちで Juan Moricz にインタビューするという唯一つの目的のためエクアドルに飛びました。我々の約束は Cheeseman 博士と Moricz の弁護士によって手配されました。我々は8月18日の指定された時間にグアヤキルの彼のオフィスに到着しましたが、Moricz が着くことができないことを知り、非常に失望しました。というのは彼がジャングル深く自分の採鉱業に精を出していたからです。私たちの長距離旅行は無駄になりました。次に別の会合を設けるまで二年が過ぎることになりました。1977年クリスマスイヴに私は Cheeseman 博士から電話を受け取りました。彼はとうとう29日に Moricz とまた実行可能なインタビューを手配できたと述べ、私に参加するよう勧

めました。彼は再びクリスマスの次の日に私に電話をよこしてきて、やむ得ない事情により結局会合が出来なくなり、私が彼に会えないのに喜んで行きますかと言いました。勿論、私は行くことを受け入れて、旧友のベン・F・ホルブルックを連れて行きました。また、我々両方の12歳の息子が加わり、彼らにとっても我々と同じくらい、会合とマチュピチュにあるインカ遺跡への休日と一緒にすることを決めたことが楽しみなことでした。Kaysville East Stake Presidency のメンバーであったホルブルックは私はその時気付いていたよりもっと有用な旅行仲間であったのです。我々は約束を無視して木曜日の午後、Pena 博士のグアヤキルのオフィスに入りました。弁護士のそばに白髪混じりの穏やかな気質で、背が高くとても身なりの良い紳士が立っていました。会合にはユタ州の Kaysville から来た Jay Looke と、通訳として LDS 教会に勤務している Elder Rigby とエクアドル両方の宣教師たちが加わりました。私は考古学の貴重品を含んだ地下の部屋を発見したというエクアドルのニュースがブリガムヤング大学の教授の一人である Cheeseman 博士の興味を引き起こしたということから始めました。彼はまたハーバード大学のバリー・フェル教授が参加したアメリカ合衆国の最近のシンポジウムで、レポートを提出し、申し立てられた記事の項目のいくつかの写真を示したと私は付け加えました。

フェル博士の当時新しく出版された本「America B.C.」では Cheeseman 博士が述べたことに類似して書かれた内容を大きく取り上げています。

この発見の意義は、もし真実であると証明されたら、アメリカ先史学についての現在の考え方を全てを根本的に変えるかもしれません。というのは人工品の多くの起源が近東であることをあらわしているからです。私は最終的には Moricz に直接話すことができました。「我々をその部屋に連れて行ってくれますか？」私は我々が自分達自身の個人的な利益のためでなく、銘が刻まれた金属板の写真を取り実証したいだけだと彼に保障しました。我々がグアヤキルに来たのは単にその部屋の遺跡への個人的な遠征旅行、つまり Moricz 氏に指揮されたブリガムヤング大学の科学者からなる探検を手配したいだけなのでした。注意深い探鉱者は私の提示に愉快地に微笑みながら、同時に流暢な英語で答えました。「私は完全に全てのことを理解しました。」と彼は言いました。「十年前、私はウルグアイの Curraso に旅行し偉大なキンボール使徒に会いました・・・。」そしてその時、彼は Jesperson 大統領と銀行頭取と一緒に行った最初の探検の話をしました。私は全く不意を襲われました。私は地下の在りかを探すこの初期の試みについて何も知りませんでした。同時に事実、手紙が Cheeseman 博士の綴じ込みの引き出しのはるか隅に閉まって置かれていたことを私は思い出しました。その書状はジャングルの惨めな旅行について言及していたエクアドルのある使徒代表からのものであることを覚えていました。今事態が全て明らかになりました。我々は以前の跡をせつせと進んで、古く思いも寄らない腫れ物を開いてしまったのです。急に私の使命が新しい次元を帯びてきました。Moricz は親切で思慮深い人だったので「そ

の以前あった出来事’により私の頼みを快く受け入れることができないと説明しました。「私は多くのことをあなたに話していないし、できないのです。申し訳ありませんが、あなたの役には立てません。」私は Jesperson グループに関する何らかの誤解について謝罪し、LDS の人々はいまだ彼の発見に本当に興味を持っていると再び断言しました。我々の会話に続いて、フレッドと Moricz 氏はお互い理解している探鉱に関する話題だけの打ち解けた会話をしました。私はこんな技術的な話では明らかに範疇外でしたし、何も貢献することが出来ませんでした。しかしながら、両方にとって金の探鉱の話題はむさぼるような興味があったことは明らかでした。私は私の友人が初期の経験によって閉められてしまった少数のドアを開けることが出来るかもしれないと希望しました。そしたら本当に彼はそれを実現させてしまったのです。我々がアメリカに戻った後、フレッドは Moricz の主張を調査するため、いくつかのアメリカの採掘業会社を手配しました。二者間でビジネス文書を文通した後で、Cheeseman と私はその往復文書のコピーを受け取りました。それには今にも Moricz がホルブルック大統領と交際を始めて、彼の援助を受けそうなことが示されていました。1977年12月に私が Pena と Moricz と一緒に訪問している間、私は代理人に渡された厚いファイルを通読することを許されました。そのファイルは Pena とイギリスの公式な代理人との急信で一杯でした。その手紙は Moricz がジャングルにある洞窟への道を先導した場合、スコットランド科学アカデミーがその旅行に対し、派遣して資金を融資する申し出を示していました。その目的は地下道の地図を作り証拠書類を提供することで、世界にそれを実証することでした。ついに相互に満足のいく条件が形式化されました。Moricz はこの冒険旅行のリーダーをすることになっていましたし、イギリス側は重要な決定全てにおいて彼の判断を受け入れることを承諾しました。遺跡の写真は撮影できますが、それを妨害することはできませんでした。

書齋における Juan Moricz (スタン・グリス撮影)。

あの有名なアメリカの宇宙飛行士ニール・アームストロングがこのグループに参加する予定でした。彼の参加はその発見の真実性や重要性を添える意図がありました。こんな人を参入させることは Moricz が最も初めのころから主張した条件の一つでした。彼の要求はこのように正確で単刀直入でしたが、これは全ての場合においても同様、彼がいちいち細かく記していました。英国人は政府によって全ての経費が支払われる大規模な探検旅行を提案しました。私は完全無欠の契約の範囲と詳細を知り、衝撃を受けまた感動しました。とうとう Moricz は契約上の合意の中に注意して読み取る全ての条件において明らかに信頼できる組織を見つけたように見えました。しかしながら、イギリスからの最後の手紙には Pena によって作成された公式の契約書に大きな変更が示されていました。この新しい要求は Moricz には承認しがたく彼の弁護士によって拒否されました。英国人からの返信はエクアドルのパートナーをビックリ仰天させました。彼らは我々が異議を持っていても、とにかく来るだろうと断言しましたし、地下の部屋の場所を知っていたので、Moricz と Pena の役目はもう無いと述べていました。ファイルの新聞記事はイギリスの遠征旅行が本当に行わ

れたことを確証していました。その公式な名称は‘失われたロスタヨス洞窟探検隊’でした。ニール・アームストロングは元来計画された時にはそのグループのメンバーでした。彼と何十人も科学者は地下トンネルを測量しその地図を作成するため、英国空軍貨物機でやって来て、たくさんの特殊機器をおろし、数週間エクアドルのジャングルで過ごしました。Moricz は私が厚いファイルの情報を読むと笑いました。彼は次のように述べました。

「私は彼らが部屋の大部分を決して見つけれないことを知っていました。彼らは比較的重要でない場所を調査してしまい、私がいなくて成功しなかったのです。彼らはほんの少しの小さな祭式のものを見つけただけでしたが、これはほとんどの遺物や金が、とうの昔にインディオによってこの特別な地域から略奪されていたからです。私が発見したものは私が漏らす選択をするまで安全です。私はこの探検が、彼らが調査した洞窟への立ち入りに際し、祭壇を邪魔したと思うと非常に不幸に思います。彼らは非常に不注意でした。」私はファイル全体を読み終えた後、「Moricz 氏はコロンブスのアメリカ大陸発見以前の宝物で一杯の古代の部屋を見つけましたが、彼が明らかにする準備ができるまでそれは隠されたままでしょう。彼は自分独りで探検隊を指示・案内し、写真を取るものは何か、触れているものは何か、検査するものは何かを決定するように取り計るのでしょうか。」と思いました。当時の専門的な科学者の間で陽気な騒ぎとなった「古代宇宙飛行士」論を書いたフォン・デニケンがイギリスの試みを知った後で憤慨し、有名な現代の宇宙飛行士を「アームストロングは騙されていたのを知っていましたか？彼は明らかに知らなかったのです！」と愚弄しました。その後1977年、オハイオ州のシンシナティ大学の教授であったアームストロングは公式の手紙で次のように返答しました。「‘失われたロスタヨス洞窟探検隊’というイギリスとエクアドルの共同事業は‘ロスタヨス洞窟’の科学的研究を行うために結成されました。私の知るところではイギリス陸軍が1976年においてこんな探検隊に400人ほどを巻き込んでいました。私の先祖がスコットランド人であったのと、この事業のイギリス側が大部分スコットランド人であったため、私は探検隊の名誉隊長として役割を果たすよう招かれたのです。私は受理しました。私はこの過去の夏の8月の初め、探検する遺跡を訪れました。私はあなたの本を読んでいませんでしたし、あなたが洞窟と何か関係があったことも知りませんでした。私は以前あなたが立てた仮説に関して声明を出しませんでした。私はドイツとアルゼンチンにその探検をレポートし、あなたの理論にも関連した雑誌の記事があったことは理解しています。それには遺跡で私が見た写真が含まれていました。どの出版物の代表からもインタビューは受けませんでした。私はその場所で高度に発展した社会の何らかの証拠を目撃したかどうか、エクアドルで尋ねられましたが、目撃していないと答えました。私はあなたがヨーロッパの新聞で読んだかもしれない何らかの記事に責任を引き受けることはありません。私は今度の探検に加入しないかというあなたの優しい招待を有難く思いますが、受け入れることはできません。」ニール・A・アームストロング



私が Moricz の地下の部屋を見つけようとした主なイギリスの試みを読み終えてから数ヶ月経って、彼がソルトレイクシティで Cheesemann 博士とホルブルックと会ったことを知りました。彼らは LDS 教会長スペンサー・W・キンボールのオフィスの会合に彼と Pena を同行しました。First Presidency のメンバーは 12 宗教会議の長老マーク・E・ピーターソンと教会長の秘書 Haycock も含めて全て出席していました。地下の発見に言及して彼は「私は会議開催を可能にするため、来るべき数年間は努力と命を捧げようと決意しましたので、今年は働いていますし、来年はこの会議のために経済的または財政的後援を準備するため働くつもりです。私はその会議に人類の真の歴史を披露しようと考え、計画しています。これが私の考えです。明らかに全てが物質的な証拠なので、暗い部屋に明かりを点けるようなものです。」と言いました。LDS のリーダーたちは Moricz の話に出た ‘ヒエログリフで書かれた図書館’ とされる金属板に特に興味を持っていました。キンボール教会長は「これらのもののいくつか、特にあなたが話した金属板について何か話していただけませんか？」と知りたがりました。Moricz は「そこには大量の大規模な板があるのです。私が ‘図書館’ とそれらの板を名づけなければいけないのはそれらが本のように一緒に納まっているからです。」と説明しました。Book of Mormon が翻訳されていた金色のタブレットの複製、会議用テーブルにあるレプリカを調べて、キンボールは「こんなようなものですか？」と尋ねました。探鉱者はすぐに答えました。「そうです。フォン・デニケンの本に発表されていたようなものです。私がそれらを ‘図書館’ と名づけたのは信じられないほどの知識の量があるのと、あなたが見たとしたらその文書の中に、板のいくつかに古代の速記で書かれたものがあることを考慮しなければならないからです。現代のモールス信号のように見えるものもいくらかあります。シュメール語やエジプト語と同じように書かれた遺物や彫像でさえ大量にあります。」「Moricz 氏のそばでこれらの板を見たことがありますか？」とキンボールはテーブルの周りにいるグループに尋ねました。「はい、しかし、彼らは我々の文明世界の人々ではありません。」と Moricz は自ら申し出て、正確な洞窟のありかをおそらく知っていた昔のアマゾンのインディオ部族について話しました。その時 Cheeseman 博士は不意に言葉を差し挟み、「彼の主張は最近の本でフォン・デニケンという人が書いたものの中に報告されていますし、あなたがブラザー・ピーターソンにこのことを言うておいたので、我々は何年も前から議論していました。我々はもっと情報を得ようとフォン・デニケン氏と文通してしまして、それらを解釈し始めるのが良いのか、それとも古代言語との関係を研究し始めるのが良いか決定するため、私は彼に手紙を書き、その板の写真を頼みました。しかし、彼は写真を送りたいくないし、我々にそれらの研究をさせておきたくは無いのです。私はこの問題に関して彼の今の見解は知りませんし、もちろんだから我々がここで会っているのでしょうけどね。」と言いました。Moricz は厳然として「古代においては多くのことが金の板で作られた金色の本の中に書かれました。彼らはいつも将来の世代のために自分たちの知識を記録しようとしていました。メキシコのピラミッドの中のいたるところにその例を見つけることができます。今日の現代人でさえ同じことをしようとして

います。我々の図書館というのは知識を保存しようとしたものです。その違いというのは古代においては最も重要な事柄が最も重要で貴重な金属の上に保存されていたということでした。」と相づちを打ちました。ピーターソンは「それこそが正に我々が信じていることです。この大陸の記録はいくつかの金属板（例えば The Book of Mormon）に収められていましたが、金属板には他の記録もあるかもしれないと我々は思っていますし、他の金属の記録のありかをあなたは我々に告げようとしていますね。もちろんそれが我々の大いなる関心事でありますので、我々がちょうど援助できるこの時点で知りたいです。何かして欲しいことはありますか？」と言いました。同時に会議用テーブル中央にある再びモロニ天使の金属板を指差して、彼は Moricz に尋ねました。「Moricz さん、これはあなたが持っている記録があるものと同じものでしょうか？」彼は「はい、それらは大体同じものです。いくつかは大きく、いくつかは小さいですがね。」と答えました。Pena 博士は「金属板はとても多くの一括りになっていますので、彼は少しだけ検査しただけです。図書館があるその部屋は非常に巨大なのです。彼はこの教会が簡単に入ってしまうほどの部屋にいたのです。いまだ彼が調査していない他の入り口が多く存在しています。」と付け加えました。「その洞窟は全てコロンブスのアメリカ大陸発見以前のものでしょうか？」と Cheeseman 博士は尋ねました。「はい、全てのものがコロンブスのアメリカ大陸発見以前のもので、全てのものがね。私は古代のローマの車を見ました。」「あなたが言っているのは荷馬車ですか、それとも二輪戦車ですか？」とピーターソンは言いました。「はい、そこにあるのは二輪戦車です。」「私は教会長があなたに何をしてあげられるのか知りたがっていると思います。あなたはこの金属のいくつかを我々に翻訳する手伝いをして欲しいですか、それとも何かして貰いたいことはありますか？」とピーターソンは申し出ました。Pena 博士は「イギリスが三年前に公式の洞窟探検隊を組織した時、私は四つの条件だけを頼みました。一つは一度洞窟に入ったら Moricz に絶対的な権限を持つ断固たるリーダーシップを取らせること、二つめは様々な国に対して所有権と保護権に関する明らかにすること、三つめはその発見を完全に保存するために世界中から重要な著名人を一緒に参加させること、四つめはこの場所を古代人類の聖域にするためにものを動かさないことでした。イギリス隊だけでなく誰も今日までこれらの条件を受け入れませんでした。イギリス探検隊は世界中からの学者と共に洞窟の一つに入っていましたけどね。」と説明しました。Moricz は「科学者のうち二人が、5、6千年以上前に洞窟内に建てられたとても興味深い祭壇を破壊してあるのを目撃していますから、彼らに電話して聞いてみると良いです。そこは面白い場所で、太陽の軌道がある時間になると正確に祭壇に当たる洞窟の入り口の下に作られていました。これが破壊されていたのです。この遠征にイギリス政府は350万ドル以上の費用をかけました。宇宙飛行士のニール・アームストロングは三日以上洞窟内部にいました。彼らは図書館を探しましたが、私がいなくては決して見つからないでしょう。60人を超える科学者、陸軍士官、相応な装備を伴うこの遠征旅行で、彼らが最初にやったことは古代の祭壇を破壊したことです。罪を犯したのは誰ですか？私自身です。というのは入り口を見つけ

る方法の情報を彼らに与えてしまったからです。そこに落ちていたのは金では無く、石と陶磁器だけでした。こんな金鉱熱を持った陸軍を想像できるはずがありません！」と言いました。その時ピーターソンは不意に「我々は金に興味があるのではなく、その記録と翻訳に興味があるだけなのです。我々は写真から自分たちの仕事を研究し行うことができるはずです。我々は工芸品を乱したり、それらを持ち出したりすることにも興味がありません。我々はそれらを写真に収め調査したいのです。それが全てです。」と口を挟みました。皆とはっきり合意をして、Moricz は彼らを遺跡に連れて行く準備ができたなら知らせることを約束し、そのいつかあるだろう探検旅行に少なくとも5人の LDS 学者を含めることを承認しましたが、明確な日付については言及されませんでした。私は今述べられている重要な会合を逃しましたが、Cheeseman 博士は親切にも言われたことの写しを私に送ってくれたのです。明らかに教会当局はいまだに Moricz の主張にとても興味を持っていました。さらに彼もまた教会によって選ばれた学術研究チームとその発見を分かち合うことに興味を持っていました。ピーターソン長老はエクアドルへの遠征のための候補者を選ぶようにと教会長によって指名を受けましたが、計画が終了する前に亡くなりました。またこの奇妙なドラマのその他主たる俳優もまたそれ以来亡くなっていたのです。スペンサー・W・キンボール教会長、ロムニー大統領、ピーターソン長老、Cheeseman 博士そして Moricz はもはや我々のもとにはいません。ホルブルックは Moricz の企業から75マイルだけ離れたところにキャンプを張りました。彼は自分の所有している権利で金を採掘していました。おそらく彼らは極めて接近しすぎたため、二人の関係は悪くなったのです。ホルブルックは今日ではつかまえどころの無い探鉱者の目的を真面目に質問しますが、この時まで彼は固く地下文明の存在を信じていました。彼は自分が主張したことを本当に理解していましたか、それともただ単にアマゾンに住むインディオの友人から聞いた物語を繰り返していたのでしょうか？何故 Moricz は自分の契約を守らず、我々をその部屋に案内しなかったのでしょうか？彼は別の間抜けな追跡に我々を連れて行っただけなのでしょうか？おそらく彼はフォン・デニケンのように単にジャングルの原住民が話した物語を繰り返していただけなのでしょうか？アマゾンのジャングルにおける宝物の物語はジャングルの敵意ある種族に通ずる地下世界の謎を残したまま、正に不明瞭な領域へと漂うのでしょうか？たぶんこれらの質問に対する回答は全く違った出所の中から見つかるかもしれません。

法外なクレスピのコレクション。

エクアドルにあるアンデスの高い山々は赤いスペインタイルの屋根と丸石の通りがある平和な町、美しいクエンカに横たわっています。市民はお互い同士や村の周りにある丘と谷に住んでいる土着のインディアと上手くやっっていくような取引に日々努めています。インディオは何百年も前からアマゾンに上る太陽を見守っていた先祖‘ケチュア’の言葉を話しました。外気にさらされバラ色の頬をした彼らは昔から働いてきたでこぼこした山々と一緒に飾り気の無い調和を放っていました。その種族の男たちはパナマ帽の下に一本の長い弁髪を後ろに垂らしていました。男性、女性そして子供たちは明るい色の飾りの縁取り

をした、同じ黒と茶色の大地の色をした服を着ています。彼らの祖先によって知らされた長い小道にそってのおのおのがのろのろ歩いていくと、彼らを村から村へと前後に運んで行ってくれます。多くの観光客はこんな方法の旅行はしませんので、サービスは急いで行われることはありませんが、完全です。村の中心から少数の区画にはカトリックの‘サレジノ大学’が立っています。富裕な家族の若い男女は粘土とテラゾのタイルが張られた中庭に面して教室がある、この中等学校に通います。横のドアから入っていくと、堂々として手で刻まれた木製の門に面した、小さな野外の囲いの中にいることが分かります。親しげな若者は我々を古い木のドアから入るように言って、個人の部屋に案内しました。ほんの少しの後、あごひげを生やした修道士のような男がキラキラ光る眼差しと優しい微笑みを浮かべながら到着して、Cheeseman 博士を抱擁しました。彼は80歳代であるが、手がぶるぶる震えているのを示していたにもかかわらず、活発で良い健康状態のように見えました。我々は高齢なのに、彼の個人のふるまいは完璧な心の能力を放出しているだけだということを知りました。この方がカルロス・クレスピ神父だったのです。エクアドルのありそうも無いユニークな考古学的論争の焦点はそれを聞いたことがある全ての人を困惑させ続けています。彼は我々を校庭の中庭に導きました。そこは古いスペインの木のドアが内部の方向に面していて、しばしば床がごしごし拭かれており、磨き上げられたテラゾに日の光が反射して光っていました。我々は何が起こるのかの準備が出来ていませんでした。クレスピ神父は自分のローブの周りにある組み紐のベルトにかかっている輪から大きな鍵を取り出し、次に薄暗い木のドアに移動し、鍵を回しました。一人の助手と一緒に彼は暗い部屋に消えました。二人はすぐに長い板に成型されハンマーで叩かれた大きな一片の金属を持って再び現れました。それは金で作られているように見えました。その板は同一のものがあるようには見えない奇妙な芸術細工が彫られていました。

#### クレスピ神父のコレクションにある彫刻された金の板

次に彼らは暗闇から何かを引きずって来ましたが、余りにも大きく運ぶことができませんでしたし、奮闘的な努力をしても漆喰の壁にもたせかける事しか出来ませんでした。それは高さが22インチで約7インチの幅があり、重さは桁外れの物であったに違いありません。私は手を伸ばしてその物に触れると、それはまるで絵が描かれているように暗い被膜を特色としていることに気付きました。最初、私はそれが柔らかく曲げやすいも同然だったので、鉛で出来ているに違いないと思いました。同時に私の指の爪がその像の塗装部分から本体に食い込んで出来た引っかき傷の輝きを見れば、それが疑いも無く純金で出来ているということを暴露していました。我々はカメラのシャッターをカチッと押し始め、クレスピ神父はとても興奮していて、ほとんど息を止めないほど話しました。彼はあたかも初めて日の光の下に持ってきたかのように個々に新しいものを見せるようとする熱狂的な我々の教師でした。

クレスピ・コレクションからの刻印された金の板と王冠。

彼の暗黒の貴重品保管室には他にどんな驚嘆すべきものが含まれているのでしょうか？その老人の指が素早く二本の切れた電線を繋ぐと部屋はすぐに白熱球の輝きにさらされました。部屋のどこにでも金、銀そして銅の輝きがその内部の明るさに加わりました。

陶磁器が収められた埃まみれの棚、星のように目を輝かせて見るも恐ろしい姿勢や奇妙なプロポーションをとらせた偶像。

床から天井にかけて、金属の腕輪、イアリング、鼻輪そしてネックレスを針金で結びつけてある大きな何百というボール紙の断片が積み重ねられていて、そのいくつかは経年によっての曇りが無いものでした。木製、金属性そして石で作られた、獣の皮ならし器、工具、戦争の道具、槍、斧、こん棒がどこでも積み重ねてありました。クレスピ神父の不思議な部屋は未知の古代人の宝を積みすぎているように見えました。それは文字通り貴重な金属で多くが作られている奇怪な工芸品で溢れていました。興味をそそる大抵のものは数え切れないほどの銅や真鍮そして金の板でした。多くのものに奇妙な銘と象形文字の記号が彫られています。他のものは象、蛇、ジャガー、全ての種類の野生動物といった釣り合わない動物の彫刻で一杯でした。二輪戦車を引く馬の彫像がエッチングで描かれていて、それは Juan Moricz が述べていた地下の部屋の‘ローマの二輪戦車’を思い出させました。

記号が入った金の平板。

我々はエジプトの階段ピラミッドのように見える肖像が刻まれた板を写真に撮りました。まだ多くの板にはアッシリアあるいはバビロニアの記号のようなものが入った芸術品が含まれていました。我々は自分たちの辺り一面きらめくばかりに豊富な量と歴史的に異常な品々を見て目まいがして来ました。我々の説明者を務めてくれたユタ州バウンティフルの銀行家ニューエル・パーキンソン、Paul Cheeseman 博士、ブリガムヤング大学在校生 Wayne Hamby、ユタ州立大学研究者 D Craig Anderson そして私はこれら空想的な輝きのまっただ中を午後過ごしました。私が世界中を旅した中で、クレスピ・コレクションを訪問したことは王冠を頂かせるものだったでしょう。その間中、私の心は Juan Moricz と彼のエクアドルの未発見の物語がさっと心に浮かんだままでした。これらのビックリ仰天させられる工芸品は彼が地下の部屋にあったと主張したものの記述と完全に一致しました。何年も我々は彼の言葉を信じ続けただけなのです。しかし今、私は彼が我々に正に告げたのと同じ種類のものを見たり触れることができました。

コレクションの中にある刻印された金の薄板。

コレクションの中にあるアッシリアあるいはバビロニアの肖像。

我々はクレスピ神父にどうやってこんな信じられないものを手に入れたのか尋ねました。彼は考古学の教科に興味を持つことになったイタリアのミラノにある大学で勉強後、50年以上、地方の教区を率いたと言いました。卒業をして聖職者になりインディオの中で働くためクエンカというエクアドルの美しい都市に行くよう命じられました。そのうちに彼

は彼らを愛するようになったのです。さらに、南アメリカで彼は自分の考古学的興味をより多く持つ機会を持ちました。彼がとても驚きそして喜んだことに、彼が主宰する宗教的儀式をすることで、大勢のインディオたちが洗礼や結婚を行いまた困った時の友人であるその優しい男に贈り物を持ってきたことです。クレスピ神父が考古学に熱中しているのに気づき、感謝しているインディオはジャングルに長い間隠されていた古代のものを彼に持って行きました。すぐに彼のコレクションはどんどん増え続け、50年後には多くの部屋を一杯にしてしまいました。

金の月の工芸品を手を持つクレスピ神父。

博物館がこれらの驚くべき贈り物をしまうために建設されましたが、我々が訪問する数年前に放火犯人によってひどく損害を受けました。クレスピ神父はどうかして遺物で一杯の3つの部屋、一つは比較的不明瞭な重要で無い贈り物の部屋、二つ目は好奇心をそそる遺物で一杯にした部屋、三つ目は金の工芸品の宝庫の部屋を救い出しました。アンデス山脈の高い辺鄙な村に駐在しているその老人には名声や運には興味がありませんでした。彼のコレクションのことを知る旅行者はほとんどいませんでしたし、まして科学者でさえ知りませんでした。彼は過去について大きな心と深い関心を寄せる平民でした。

コレクションの中にある彫刻された金の薄板の円柱。

「インディオはどこでどのようにしてこれらの信じられないものを見つけるのでしょうか？」と我々は驚きました。「おお、彼らはジャングルにある洞窟と地下の部屋からそれらを得るのです。」と彼は無造作な態度で答えました。「クエンカではここから200キロ以上のトンネルが始まっているのです。それらが山々からアマゾン近くの西の低地へと張り巡らされています。」私の想いがまた Juan Moricz と彼の地下世界の主張に向けられました。Cheeseman 博士の助手 Wayne Hamby はクレスピ神父と一緒にさらに数日をかけて完全なコレクションの目録を作ってそしてそれらの写真を撮りました。彼の成果はブリガムヤング大学の学部で定年を迎えた後亡くなった Cheeseman 博士のファイルに収められています。

親切な聖職者へ訪問してから2年、私はベン・ホルブルック、我々の二人の息子そして通訳として二人のエクアドルの LDS 宣教師と一緒にクエンカに戻りました。我々はカルロス・クレスピが無くなったことを知らせてくれた若い聖職者に歓迎を受けましたが、彼のコレクションがもはや公然と見ることはできなくなりました。我々はその遺物を見るため長い距離を旅行してきたことを彼に納得させようと努力したにもかかわらず、彼は我々に宝物を見せることを頑固に拒否しました。彼はパチカンからの命令で工芸品のある部屋を見ることができないのだと主張しました。私の知る限りでは、老神父の死後、宝を見たことがある外部の世界のものはいません。クレスピ・コレクションが保管されているサレジノ大学のいくつかの区画は政府博物館があり、聖職者が蓄積したのと類似したものをいまだ

展示しているかどうか我々が決定したかったのは正にそこでした。学芸員は入り口で我々に挨拶しました。私は彼がクレスピ・コレクションについて何か情報を持っているか尋ねました。彼は神父の工芸品を見たことがあり、それらは本物であることに気付いていると答えました。クレスピが死んでから、その多くのものがエクアドルを離れローマに船で運ばれたと信じていると彼は説明しました。エクアドル政府は実際バチカン宛の多くの箱を途中で奪い、国宝として工芸品を押収したと彼は言いました。私は学芸員の疑惑を確認するか否定するかどちらもできませんでした。大切な聖職者のため感謝に満ちた原住民が、明かさねずに不明瞭なままのジャングルの数世紀から外に運び出して、彼らが作った金以上に価値のある古代の宝物は今日バチカンの下で無表情な暗闇に隠されたままになっているかもしれません。

終わり

この記事に関するスタン・グリスのコメントと見解・・・金属図書館に関して言えば、私は Juan Moricz の話が真実かどうか重大な疑いを持っています。私は Juan Moricz が真実を話していた、あるいはロスタヨス洞窟で何か歴史的な価値を見つけたというような証人あるいはその他の確固たる証拠を見つけてはいません。何でも可能ですが、‘信頼’だけに確信の基礎に置くことは拒否します。この物語とクレスピ神父に関して言えば、Pino Turolla の結論に賛成しがちです。私はクレスピ神父がおそらく自分の歴史的結論に関して全くもうろくしていて無知だったと思います。私は彼の大多数の‘金属’工芸品はいんちきであるとも信じています。彼の陶器の工芸品のほとんどは本物です。というのは私がそれらを自分で見て調査したからです。